スケジュール

同じ日の演目は、すべて続けてご覧いただけます。

		6月 1日[土] B	2日[日] KB	8日[土] B	9日[日]	15日[土] B	16日[日]	22日[土] B	23日[日]	28日[金]	29日[土]	30日[日]
静岡芸術劇場◆	脱線! スパニッシュ・フライ			15:00	15:00							
	生と死のあわいを生きて						14:00 ☺					
	母よ、父なる国に生きる母よ							14:00 ☺	13:00			
	Hate Radio										13:30	13:30 ☺
野外劇場「有度」※★	黄金の馬車	19:30		19:30		19:30		19:30				
屋内ホール「楕円堂」◎	室内					16:00	17:30	16:30	16:30			
稽古場棟「BOXシアター」※◎	神の霧				11:30			10:30 16:45				
	Waiting for Something					13:30	12:00 16:00					
グランシップ広場※★	ポリシネルでござる!	14:00 17:00	12:30 15:00									
ふじのくに野外芸術フェスタ★	夢の道化師									20:00	20:00	
	ベトナム水上人形劇									17:30	14:00 17:30	15:00 16:30
		東京バス(往復) 三島・沼津バス		東京バス(往路) 浜松バス	東京バス(復路)	東京バス(往路)	東京バス(復路)	東京バス(往路)	東京バス(復路)			

東京、浜松、三島、沼津から劇場までの直行バスを運行いたします!
詳しくはP.46をご覧ください。

※ …背もたれのない客席になります。
◎ …乳幼児を連れてのご入場はご遠慮ください。
★ …雨天時でも上演いたします。客席内で傘はご利用いただけませんので、レインコートなどをお持ちください。
◆ …未就学児との観劇をご希望の方は、お問い合わせください。
KB …かえっこバザール開催!(詳しくはP.27をご覧ください) B …フェスティバルbar開催!(詳しくはP.39をご覧ください)
☺…印の公演日に、グランシップ託児サポーター(ボランティア)による無料託児サービスがあります。ご希望の方は、公演の一週間前までにご連絡ください。定員になり次第、締め切らせていただきます。
お申込み:SPACチケットセンター TEL.054-202-3399 ※対象は2歳以上の未就学のお子様に限ります。

チケット料金 4,000円 [一般大人1公演]

みるみる割引	3,500円 (3公演以上お申込みの場合 1公演1名様) ※電話・窓口のみでのお取り扱いになります。
ペア割引	7,000円 [ペアチケット(2枚)]
グループ割引	3名様以上で1名様 3,200円 ※学割対象者は人数に含みません。※10名様以上は電話・窓口のみでのお取り扱いになります。
ゆうゆう割引	3,400円 ※満60歳以上の方が対象となります。※公演当日、受付にて年齢のわかる身分証をご提示ください。
学割	2,000円 [大学生・専門学校生] 1,000円 [高校生以下] ※公演当日、受付にて学生証をご提示ください。
障がい者割引	[障害者手帳をお持ちの方] 2,800円 ※付き添いの方(1名様)は無料となります。※電話・窓口のみでのお取り扱いになります。

※各種割引を組み合わせてのご利用はできません。※割引をご利用の際は、必ずご予約時にお知らせください。

『Waiting for Something』
一般1公演 2,000円、学割[大学生・専門学校生・高校生以下]1,000円

『ポリシネルでござる!』
500円 ※未就学児は無料となります。

『神の霧』
500円

『夢の道化師』『ベトナム水上人形劇』
無料 ※ご予約は必要ありません。

SPACの会会員 先行予約受付開始
4月14日(日)10:00

チケット前売り開始
4月21日(日)10:00

チケット購入方法

電話

SPACチケットセンター
TEL.054-202-3399
受付時間/10:00〜18:00

ウェブ予約

http://www.spac.or.jp/ticket.html

携帯電話からの予約

http://www.spac.or.jp/m/
右のQRコードからもアクセスできます

窓口販売

静岡芸術劇場チケットカウンター
受付時間/10:00〜18:00

セブン・イレブンでの販売

店内マルチコピー機をご利用ください。

※チケットのご予約受付は公演前日の18時までとなります。

当日券
公演当日、開演1時間前より、各公演会場の受付で販売します。
『神の霧』『ポリシネルでござる!』は開演30分前からの販売となります。
※当日券の有無を公演当日に必ずお電話もしくはtwitter (@_SPAC_)でお確かめください。

この冊子に関するご意見をお聞かせください。ハガキ、FAX、メール、何でも結構です。お寄せいただいた方の中から抽選で10名様にSPACグッズをプレゼントいたします。

spac artistic director Satoshi MIYAGI
主催・お問い合わせ:SPAC-静岡県舞台芸術センター
〒422-8005 静岡県静岡市駿河区池田79-4 TEL.054-203-5730 FAX.054-203-5732 E-mail mail@spac.or.jp
Twitter公式アカウント @_SPAC_ Facebook公式ページ http://www.facebook.com/SPACshizuoka
SPAC公式サイト http://www.spac.or.jp SPAC 検索

後援:静岡県教育委員会、JAPANFOUNDATION 国際交流基金、静岡市、静岡市教育委員会
ふじのくに芸術祭共催事業 ふじのくに芸術回廊

ふじのくにせかい演劇祭

WorldTheatreFestivalShizuoka under Mt.Fuji 2013 6/1[土]→6/30[日] 演劇で世界と静岡をつなぐ1ヶ月

© Ed TSUWAKI

宮城聰『黄金の馬車』 クロード・レジ『室内』
小島章司『生と死のあわいを生きて』 ラ・パンデュ『ポリシネルでござる!』
中野成樹『Waiting for Something』 ヤン・クラタ『母よ、父なる国に生きる母よ』
ヘルベルト・フリッチュ『脱線! スパニッシュ・フライ』 ミロ・ラウ『Hate Radio』

開幕イベント 上演ラインナップ紹介/フリー・オープニング・カフェ
『室内』関連企画上映会『神の霧』
ふじのくに野外芸術フェスタ『夢の道化師』/『ベトナム水上人形劇』ほか

This theatre is Your theatre
spac SHIZUOKA PERFORMING ARTS CENTER
芸術総監督 宮城聰
静岡県舞台芸術センター

生れかわり ことばでできた わたし

この何年間か、「わたしたちはこれを機にすっかり変われるのではないか」という期待が、この国に流れていたように思います。

でも現在はどうでしょうで、変わるのはいろいろと難しいし、むしろ変わらずに前のままやっていくほうがいいという気分が主流になってはいないでしょうか。

たしかに、外側の変化をつかって自分たちが変わるというやりかたは、いささか手抜きなのかもしれません。それに考えてみると歴史上のある地点（たとえば敗戦）で日本人ががらりと変わったように見えるのは、一種の目の錯覚なのかもしれません。

とはいえ、人間は変わらない、と冷ややかに言うことからは何も生まれない気がします。

つまりいまこそ、人間と社会を「継続性」の中で見なければいけない時かなと思うようになりました。

なるほど、人間はそう簡単には変われない。

でも、まるで「不変」を選んだかのように見える人ほど、着実に変わっている。それをものがたりにすることは改めて人間の可能性を感じさせてくれます。

では、社会のほうはどうでしょうで

——宮城聰

ふじのくに⇄せかい演劇祭 2013

WorldTheatreFestivalShizuoka under Mt.Fuji

ラインナップ紹介

ふじのくに⇄せかい演劇祭

- 静岡芸術劇場
- 舞台芸術公園 野外劇場「有度」
- 舞台芸術公園 屋内ホール「楕円堂」
- 舞台芸術公園 稽古場棟「BOXシアター」
- グランシップ広場

ふじのくに野外芸術フェスタ

- 清水マリンパーク イベント広場
- グランシップ広場
- [富士宮]神田川ふれあい広場

表紙イラスト：エドツワキ

1966年広島生まれ。
イラストレーター、アートディレクター、画家。
1980年代の終わりから、ドロウイング、ペインティング、イラストレーション、アートディレクション、グラフィックデザイン、写真、服飾、舞台美術、執筆等を生業とする。
首の長い独特のフォルムの女性の肖像画で知られる。
www.edtsuwaki.com
http://editioninc.tumblr.com/

演劇／日本
『黄金の馬車』 P4~9
演出:宮城聰　原案:プロスペル・メリメ、ジャン・ルノワール　台本:久保田梓美

『マハーバーラタ』仏ツアールポ P10~11

演劇／フランス、日本
『室内』 P12~14
演出:クロード・レジ　作:モーリス・メーテルリンク　訳:横山義志

舞台映像／フランス
クロード・レジ演出
舞台映像作品上映会『神の霧』 P15
監督:アレクサンドル・バリー　原作:タリエイ・ヴェースオース（連作『鳥』より）　翻訳:レジス・ボワイエ

演劇／ドイツ
『脱線! スパニッシュ・フライ』 P16~18
演出・美術:ヘルベルト・フリッチュ　原作:フランツ・アルノルト、エルンスト・バッハ

人形劇／フランス
『ポリシネルでござる!』 P20~22
演出・出演:エステル・シャルリエ、ロミュアルド・コリネ

演劇／日本、韓国
『Waiting for Something』 P24~26
（サミュエル・ベケット『ゴドーを待ちながら』より）
作・演出:中野成樹　原作:サミュエル・ベケット

演劇／ポーランド
『母よ、父なる国に生きる母よ』 P28~30
演出・翻案・編曲:ヤン・クラタ　原作:ボジェナ・ケフ

フラメンコ／日本
SHOJI KOJIMA FLAMENCO 2013
『生と死のあわいを生きて』 P32~34
―フェデリコの魂に捧げる―
踊り:小島章司

演劇／スイス、ドイツ、ルワンダ
『Hate Radio』 P36~38
脚本・演出:ミロ・ラウ

ふじのくに野外芸術フェスタ
『夢の道化師 ～水上のイリュージョン～』
『ベトナム水上人形劇』『古事記!! エピソード1』ほか P42~43

ふじのくに⇄せかい演劇祭2013 開幕イベント

上演ラインナップ紹介

Spectator's Guide to the Lineup

「ふじのくに⇄せかい演劇祭2013」の上演作品を一挙紹介！
SPAC俳優の奥野晃士が、
映像とともに<見どころ>をご案内します。

6/1［土］13時開始

所要時間：30分（予定）
司会：奥野晃士（SPAC俳優）
会場：静岡芸術劇場
予約不要・入場無料

Presenter: OKUNO Akihito (Actor, SPAC)
■1 June at 13:00
Duration: 30 minutes (expected time)
Place: Shizuoka Arts Theatre
Admission Free

フリー・オープニング・カフェ

Free Opening Cafe

フェスティバルの初日を飾る<スペシャル座談会>！
SPAC文芸部の3人が、
漫画家のしりあがり寿さんを特別ゲストに迎え、
今年の演劇祭について語り合います。
広い窓から季節おりおりの美しい富士山を眺めることができる、
静岡芸術劇場2階の「カフェ・シンデレラ」で、
お茶を片手にご参加ください。

6/1［土］15時30分開始 予約不要・入場無料
所要時間：120分（予定）

スピーカー：大澤真幸、大岡淳、横山義志（以上、SPAC文芸部）
ゲスト：しりあがり寿（漫画家）
会場：静岡芸術劇場２階 カフェ・シンデレラ

Panelist: OHSAWA Masachi, OOKA Jun,
YOKOYAMA Yoshiji (all from The Literary Department, SPAC)
Guest Speaker: SHIRIAGARI Kotobuki (Cartoonist)
■1 June at 15:30
Duration: 120 minutes (expected time)
Place: Cafe Cinderella (Shizuoka Arts Theatre 2F)
Admission Free

特別対談

なぜ＜演技だけが残る世界＞に共感するのか？
～『黄金の馬車』の大いなる朗らかさと、せつなさ～

野崎歓×宮城聰

フランス文学者　　SPAC芸術総監督

いよいよSPACの演劇祭シーズンが到来する。多彩な演目の中で宮城聰演出作品は、これまでも格別の存在感を放ってきた。昨年の『マハーバーラタ』が大盛況であったため、今年はさらに期待が高まる。そこで宮城聰が新作のために素材として選んだのは、一部の熱狂的なファンを持つ、フランスの映画作家ジャン・ルノワールの傑作映画『黄金の馬車』であった。なぜ、今この作品なのか?対談相手に著書『ジャン・ルノワール 越境する映画』で知られ、フランス文学の研究翻訳で活躍する東京大学教授・野崎歓氏を迎えた。熱気をおびた対話が本作の魅力に光をあてる。

映画『黄金の馬車』の衝撃

野崎：宮城さんが『黄金の馬車』を演劇にするという連絡をいただいたとき、びっくりしたと同時に本当に嬉しかった。ぼくはジャン・ルノワールの研究者というよりも、とにかくミーハーなファンなんです。ルノワールには純粋なよさがあると信じています。映画のフィルムの時代が終わり、20世紀もどんどん遠くなっていく。そんな中、寂しい気持ちがありました。あんなにいきいきした生命力豊かな世界があったのに、いつしか忘れられて、最後は消えていくのかなと。入れあげていただけにメランコリックな気持ちが湧いてきていたんです。それだけに、やった！と思いましたね。ルノワール本人も喜ぶだろうと思えてならないんですよ。

宮城：初めて映画館で『黄金の馬車』を観た直後から、いつか芝居にしたいと思っていました。ルノワールはなんて役者を愛しているんだろうと思って。「寂しくないかい?」という最後の台詞がルノワールの声としか思えなくなる。ぼく自身も女優にそう呼びかけているような気持ちになります。女優の答えは「ちょっとね」でしょう。それ以外に答えようがないじゃないかと（笑）。これまた僕の聞きたかったことそのものだと思えて。でもその頃は、ク・ナウカという劇団で〈二人一役〉の手法を追求している頃でした。劇団が世界の演劇シーンに入っていくために、手法の追求と同時に、その手法にふさわしい内容を求めていましたから、『黄金の馬車』を上演することはできませんでした。2007年にSPACへ来て、〈二人一役〉ではない芝居をつくる方向になっていきます。〈二人一役〉は、まず違和感をつくっておいて、次第に立体的に舞台を見せる仕掛けです。SPACの観客は初めて芝居を観る人も多いですから、いきなりアンチテーゼを突きつけても効果がないかもしれないと思ったんです。それで『黄金の馬車』が具体案として考えられるようになった。戦前に小説家の今日出海（こん・ひでみ）が訳したプロスペル・メリメの原作戯曲『サン・サクルマンの四輪馬車』を買ってみたりして。

野崎：今日出海さんが訳されているんですか？ 知らなかった。

宮城：そうなんです。装丁がとても綺麗な本です。そうは言ってもまだやれるとは思えなかった。それが不思議なもので、2011年の『グリム童話～少女と悪魔と風車小屋～』公演のときに、野崎さんにトークゲストで来ていただいて、「野崎さんはルノワールの専門家だから、もし『黄金の馬車』をやることになったら相談すればいいのかな…」とふと思ったんです（笑）。そんなことを考えていると、できる気持ちがしてくるんです。

傑作をつくり直す覚悟

宮城：3.11以降、演劇に祝祭が求められる気がしています。ハッピーエンド、大団円と言いますか。大昔の演劇は日常がしんどいから1年に何度かは楽しくしようというものだったでしょう。ところが、ある時期から、日常がぬるいから演劇で厳しい現実を見つめよう、と逆になったのかもしれません。そこがさらに3.11で反転した気がします。これにふさわしい戯曲は何だろうと。意外に近現代戯曲にないんです。

野崎歓（のざき・かん）
1959年新潟県高田市生まれ。主な著書に『フランス小説の扉』（白水社、2001年）、『赤ちゃん教育』（青土社、2005年、講談社エッセイ賞受賞）、『異邦の香り―ネルヴァル『東方紀行』論』（講談社、2010年、読売文学賞受賞）等。訳書にジャン・ルノワール『ジョルジュ大尉の手帳』（青土社、1996年）、サン＝テグジュペリ『ちいさな王子』（光文社古典新訳文庫、2006年）、ネミロフスキー『フランス組曲』（共訳、白水社、2012年）など多数。

野崎：問題提起型ですね。

宮城：近現代戯曲には実相をあばくという面がありますから。そこで『黄金の馬車』がいいじゃないかと。映画には、コメディア・デラルテが南米に来たという実に突飛なアイディアがあります。よく考えればありえない（笑）。しかし嘘臭さの中ではもっともらしい感じもする。これを日本に置き換えるならば、京都の田楽一座が船でしか渡れない南国に巡業するのに近いのではないかと、映画を見た頃から思っていました。今回そういう翻案を考えています。

野崎：本来これは演劇としてやるべき題材です。なにしろ原作はメリメの戯曲だし、オッフェンバックの舞台もある。それをルノワールが映画にして、まったく新たな生命を吹き込んだわけですが、宮城さんがもう一度演劇の方に取り戻す。そこに脈々と引き継がれているものが見えてくる。21世紀になっても、やっぱり変わらない面白さがあるんじゃないかと、いきなり興奮してしまいました。ただ同時に、かなわないなあとも思ったわけです。ぼくなんかは、あの映画いいぞ！いいぞ！と言って一生が終っていくんですが（笑）、その先があるというのは大変なことですね。この映画を観た後は、これはもう完璧なものを観てしまったと思うでしょう。頭でっかちな映画ではないし、あったかい作品です。これを別の形で捉え直すのは大変なこと。でも、クリエイターはチャレンジしないといけないのでしょうね。すごい。しかも、ぼくにとってルノワール的なものは憧れの対象であるだけに、日本の現代にそうざらに見つかるものではないとも思ってしまうんです。いまのフランスにもない。人間らしさがのびのびと展開されるような時空と言いますか。これを脚色するのですから、宮城さんの覚悟と勇気は相当なものだと思います。

宮城：まさにのびのびした喜び。あれこそ狙って出せるものじゃない。ぼくはこういう言い方をよくします。世界をしゃもじですくう。宮城聰なら宮城聰が世界をこう見たよと。すると、中身よりしゃもじの形の方がお客さんの印象に残ってしまう。ここに芸術の小ささがあります。そういうことがない芸居をつくりたいと常々思っているんです。

演技することの不思議

野崎：主演の女優さんは勝負でしょうね。夢のような役ではないですか？ 演劇の夢を体現する役だし、それを演劇で実現してしまうんですから。

宮城：女優にとっては、お客さんの共感を呼ぶのかという疑問もあるようです。ぼくらは女優ではないので、それこそ女優冥利に尽きるだろうと思ってしまいますが。

野崎：調和的なエンディングとは言い難いからですか？

宮城：それもありますし、役が自分に近過ぎるじゃないですか。女優はある年齢に達すると、自分には女優以外の人生がないんだと気づかざるをえない。そういう自分というものをここで表現して、果たして世の中のほとんどの人に関係があるんだろうかと。

野崎：なるほど。それだけ切実な題材でもあるんですね。非日常的な、血沸き肉踊る部分もあれば、非常な寂しさや痛切な孤独がある。それこそ人生を棒にふりながら生きているというような。そのテーマ自体がひしひしと身に迫ってくる。

宮城：映画の主演女優アンナ・マニャーニもそんな感じですね。最後の台詞で、これで観客は感動しているわよね、とは思っていない。それがまたいいのですが、女優本人にしてみれば言えば言うほど寂しくなるようなエンディング。そういうところはある種、残酷な作品です。

野崎：演じる側にしてみれば、本当にそうでしょうね。最後にふっとわれに返るところがある。女優から見れば自分でも答えの出ない問題をそのまま投げ出していいのかと思うかもしれない。でも、見ている側も、女優さんは大変だなと高みの見物をしているわけではないんですよね。われわれ自身の問題でもあると感じる。それが不思議です。

映画『黄金の馬車』　写真提供：BETA FILM

宮城：想像するに、旅一座と関係のない人生を送っている人も、父親を演じていたり、サラリーマンで部長さんを演じていたり、学校の先生を演じていたり、お医者さんを演じていたり、女房の前で亭主を演じていたりする。演じているという感覚がなくなることはない。だから演じることを仕事にしている人を見て、へえ、こういう人もいるんだ、と人ごとにはなかなかならないのかもしれない。演技しか最終的に残らないということに、どこか共感するのかなと思います。

野崎：プリミティブな形の劇団によって演じられながら、そういう反省まで持っていくところにあの映画のすごみがあります。劇中劇の場面で、人気者の闘牛士が客席にやってきて観客がみんな後ろを向いてしまう。するとアンナ・マニャーニが怒って、そっちがそうならと客席にお尻を向けて演じ始めますよね。舞台ならではのストレートなコミュニケーションで、実に愉快です。でも、どこまで行っても演技の外には出られない。そのことの厳しさも見据えているんですね。

構成：西川泰功

2013年3月5日　協力：アンスティチュ・フランセ東京

ジャン・ルノワール（1894-1979）と映画『黄金の馬車』

映画監督ジャン・ルノワールは、画家ピエール=オーギュスト・ルノワールの次男で、「フランス映画の父」。フランス、アメリカ、インド、イタリア等、国境を横断して活動し、人間性へのおおらかな信頼を作風とした。映画作家としての表現の追求から芸術映画の先駆者と言える。後世に与えた影響は大きい。代表作に『大いなる幻影』『フレンチ・カンカン』等。映画『黄金の馬車』（1953年）の舞台は18世紀の南米ペルー。イタリア発祥の喜劇コメディア・デラルテ一座の女優と3人の男の恋物語を中心に、一座の奮闘をおかしみたっぷりに描き出した。現実と芝居を入れ子構造にし、人生の悲哀を浮き彫りにしている。

SPACの舞台音楽 その類い稀な成り立ちに迫る
～宮城聰の劇世界を支える棚川寛子の仕事～

宮城聰演出作品を観劇した人ならば誰しも気づくことがある。
劇世界を支える音楽が俳優による生演奏なのだ。
そのプランナー、音楽監督の棚川寛子とは何者なのか。どのように舞台音楽を制作しているのだろうか。

宮城聰との出会いから始まった

棚川が宮城と出会ったのは19歳の時。舞台を志してはいたが、大きな声を張り上げ動きまわる当時の流行に違和感を持っていた。そんなとき宮城の一人芝居に出会い、「言葉との距離感がある」ことに共感した。宮城演出作品のオーディションを受けるも不合格。だがその後、直接声がかかり、参加することになる。初めのうちは効果音程度に楽器を演奏する一俳優だったが、次第に音楽に肩入れする。1996年『天守物語』を節目に音楽のボリュームが増加。それでも俳優が生演奏することの強みにまだ気づかなかった。1999年『王女メデイア』に至り、演技と音楽のシンクロを肌で感じるようになっていく。

『王女メデイア』©内田琢麻

稽古場でゼロから立ち上げる

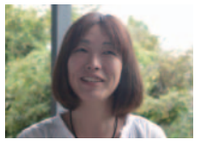
棚川の音楽づくりは独特だ。稽古場で即興的に音のフレーズを組み立てる。楽譜があるわけではない。棚川いわく「音楽をつくるだけなら難しくない」。ただ「それだけではおもしろくない」。『王女メデイア』で発見した音楽と演技の交感は、2012年『グリム童話～本物のフィアンセ～』で明確に自覚できた。制作期間に不慮の事故で亡くなったSPAC衣裳部竹田徹の存在が大きい。「初日に徹ちゃんに捧げるつもりだったんです。ところが、演奏中に“捧げる”なんておこがましいと気づいて、生かされていることを強烈に実感しました。」受動的にエネルギーを感じとることが重要だと言う。これがレベルアップの鍵になる。

感覚をひらくための訓練とは？

稽古ではリズムをとりながらしりとりや台詞を用いたゲームをする。リズムの維持と言葉の操作を同時進行し、知覚や感覚を刺激するのだ。棚川は演劇制作の経験をもとに音楽ワークショップも行う。とくに特別支援学校に行くことが多い。「私の方が教わることが一杯。それを演劇の現場に持ち帰っています。」中高生鑑賞事業や海外公演など成果は出ているが、「まだ先がある」と感じている。「SPACで5年、俳優たちに蓄積ができてきました。もっとよくするためには演奏者同士の信頼が必要。喧嘩した後の演奏はとげとげしいんですよ（笑）」明るい笑顔に現場を生きる演劇人の強さがのぞく。

（文：西川泰功）

『グリム童話～少女と悪魔と風車小屋～』©三浦興一



棚川寛子（たなかわ・ひろこ）

舞台音楽家。音楽家矢野誠に影響を受けパーカッションを始める。演劇の舞台音楽や、パフォーマンス活動などを行う。近年の主な活動には、SPAC・静岡県舞台芸術センターをはじめ、劇団 Ort-d.d やアートネットワークジャパン「子どもに見せたい舞台」シリーズの音楽、「芸術家と子どもたち」のワークショップ、セミンコオーケストラの活動などがある。

© Ed TSUWAKI

舞台芸術公園 野外劇場「有度」

黄金の馬車

Le Carrosse d'Or［The Golden Coach］

世界初演

演劇／日本 Theatre／JAPAN　上演時間：未定（120分以内）　日本語上演／英語字幕

演出：宮城聰
原案：プロスペル・メリメ、ジャン・ルノワール
台本：久保田梓美
音楽：棚川寛子
出演：阿部一徳、石井萠水、大内米治、加藤幸夫、木内琴子、小角まや、鈴木真理子、大道無門優也
武石守正、舘野百代、永井健二、中野真希、本多麻紀、牧山祐大、美加理、三島景太、森山冬子
山本実幸、吉見亮、米津知実、若菜大輔、若宮羊市、渡辺敬彦

6/1（土）、6/8（土）、6/15（土）、6/22（土）各日19時30分開演

◎終演後に宮城聰（演出）とゲストによるアーティスト・トークを行います。
6月1日　決定次第SPAC公式サイト等でお知らせします。
6月8日　**柳家花緑**（落語家）
6月15日　**武富健治**（漫画家）
6月22日　**北川フラム**（アートディレクター）
◎開演前と終演後に「カチカチ山」で「フェスティバルbar」を営業いたします。

一般大人4,000円／大学生・専門学校生2,000円／高校生以下1,000円

☆SPACの会特典のほか、ゆうゆう割引、みるみる割引、ペア／グループ割引料金などがあります。（最終頁参照）

直行バス　渋谷発　三島・沼津発　浜松発　劇場直行バスを運行いたします。詳しくはP.46をご覧ください。

空間構成:木津潤平　美術:深沢襟　衣裳デザイン:駒井友美子　照明デザイン:大迫浩二　照明操作:松村彩香　音響:水村良、山崎智美
ヘアメイク:梶田キョウコ　舞台監督:三津久　舞台:山田貴大、佐藤洋輔　制作:大石多佳子、尾形麻悠子　製作:SPAC-静岡県舞台芸術センター

Directed by
MIYAGI Satoshi
Inspired by
Prosper MÉRIMÉE and Jean RENOIR
Text by
KUBOTA Azumi
Music by
TANAKAWA Hiroko
Performed by
ABE Kazunori, ISHII Moemi, OUCHI Yoneji
KATO Yukio, KIUCHI Kotoko, KOKADO Maya
SUZUKI Mariko, DAIDOMUMON Yuya
TAKEISHI Morimasa, TATENO Momoyo
NAGAI Kenji, NAKANO Masaki, HONDA Maki
MAKIYAMA Yudai, Micari, MISHIMA Keita
MORIYAMA Fuyuko, YAMAMOTO Miyuki
YOSHIMI Ryo, YONEZU Tomomi
WAKANA Daisuke, WAKAMIYA Yoichi
WATANABE Takahiko

■1, 8, 15, 22 June at 19:30

Open Air Theatre UDO,
Shizuoka Performing Arts Park
Duration: undecided (less than 120 minutes)
In Japanese with English subtitles

※未就学児でもご覧いただけますが、
ほかのお客様の鑑賞のさまたげになる場合は、
係員が対応をお願いすることになりますので、
あらかじめご了承ください。

「人生は芝居か?芝居こそが人生か?」ジャン・ルノワールの名作映画に着想を得た、絢爛豪華絵巻!

「わからないわ、舞台でも人生でも、懸命に生きているのに。舞台だとうまくいくのに、人生だと愛するものを壊してしまう。どちらに真実があるの? どこまでが舞台で、どこからが人生? 」主人公のカミーラはそう呟く。人生は舞台の上か下か。境目もない現実の世界で、求める幸せはどんな形をしているのだろう? 山野を揺るがす打楽器の音色に身を任せるうちに、やがて舞台と客席の境界は曖昧になってくる。見惚れ、聞き入り、魂を沿わせ、万感の思いが入り乱れるラストシーンで、あなたは果たして「どちら側」に立っているのだろうか? 絢爛豪華な黄金の馬車の輝きが去った後に残されるのは果たして…。

『マハーバーラタ』フランス公演を絶賛の中で終えた宮城聰が、初夏の野外劇場で、待望の祝祭音楽劇・最新作!

俳優たちがパーカッションを鳴らし、独特のグルーヴ感で会場を包み込むSPACの祝祭音楽劇。既に静岡ではおなじみの光景なのかもしれないが、こんなことができる劇団は世界広しと言えどもここだけである。歌ではない、ダンスでもない、しかし日本人の身体の底に根ざしたリズムとしなやかな所作は間違いなく見るものの心に「非日常」の感動を呼び起こす。古代の森に抱かれた有度山の野外劇場に響く棚川寛子の音楽もますます冴えわたり、本年2月にフランス各地で絶賛を受けた『マハーバーラタ』の系譜に連なる宮城聰の最新作から目が離せない!

みどころ

かつてフランスの巨匠が新世界を舞台に描いた女優讃歌が、時空を超えて言祝がれる。

SPAC芸術総監督・宮城聰でなければ、誰がこの映画を舞台化しようなどという発想に至るだろう。日本の演劇シーンを静岡から牽引する宮城が、最新作として着手したのはメリメの戯曲『サン・サクルマンの四輪馬車』を下敷きに1952年にジャン・ルノワールが監督した映画『黄金の馬車』。それを室町時代の日本に翻案する壮大な構想だった。女優カミーラと旅一座の面々は都を食いつめて土佐にやってきた田楽一座に、彼らの演じるコメディア・デラルテ（仮面劇）は、古事記の劇中劇に姿を変え…見る側、見られる側が多重に交錯する夢のような舞台が野外劇場に現出する。フランスツアー各地で賞賛を浴び一皮むけたSPACの面々に、この舞台のためにオーディションで選ばれた瑞々しいキャストの加わった俳優陣の演技も見物である。かねてより日本語の特色を深く追究し、言葉と肉体を分離し、現在は「詩の復権」をテーマに掲げて日本から世界に放つ演劇の言葉を模索している宮城聰だからこそ創作可能な、日本人の身体、言葉、音楽が調和し、三位一体の結晶となって輝きを放つステージ。時代と国境を越えて、この舞台は虚構と現実の狭間を生きる全ての人間たちに衝撃と祝福を与えるだろう。　（大西彩香）

あらすじ

時は室町。土佐の小京都と呼ばれ栄えていた四万十の村に、国司の一条家がその権勢を示すために都から取り寄せた黄金の馬車と共に、旅役者の一座がやってくる。一座は女優・カミーラを中心に古事記の天地創造神話を上演するが、全く受けない。しかしカミーラの美貌を目にした国司は、彼女にすっかり夢中になって、ついには黄金の馬車をも与えてしまったものだから、方々からの反発を受け政（まつりごと）は大混乱。男たちの愛憎と権謀が渦巻く中、カミーラが最後に立つ場所は…。

原案者プロフィール ｜ プロスペル・メリメ　Prosper MÉRIMÉE（1803〜1870）

フランスの作家、考古学者、政治家。オペラの原作となった小説『カルメン』（1845）で知られる。スペイン語に堪能で、デビュー作の一つ『クララ・ガズル戯曲集』（1825）は、スペインの女優による作品と偽って出版された。ペルーの伝説的女優ミカエラ・ビリェガス（通称ペリチョリ、1748〜1819）をモデルにした戯曲『サン・サクルマンの四輪馬車』（1829）は、当初はこの架空の女優の名義で発表された。この物語はオッフェンバックのオペラ『ラ・ペリコール』（1868）の原作ともなり、ジャン・ルノワールはこの戯曲にもとづいて映画『黄金の馬車』のシナリオを執筆した。

演出家プロフィール ｜ 宮城聰（みやぎ・さとし）

1959年東京生まれ。演出家。SPAC-静岡県舞台芸術センター芸術総監督。東京大学で小田島雄志・渡辺守章・日高八郎各師から演劇論を学び、90年ク・ナウカ旗揚げ。国際的な公演活動を展開し、同時代的テキスト解釈とアジア演劇の身体技法や様式性を融合させた演出は国内外から高い評価を得ている。2007年4月SPAC芸術総監督に就任。自作の上演と並行して世界各地から現代社会を鋭く切り取った作品を次々と招聘、また、静岡の青少年に向けた新たな事業を展開し、「世界を見る窓」としての劇場づくりに力を注いでいる。代表作に『王女メデイア』『マハーバーラタ』『ペール・ギュント』など。04年第3回朝日舞台芸術賞受賞。05年第2回アサヒビール芸術賞受賞。

SPACパリ公演の成功に思う、世界の演劇シーンのいま。

文／演劇ジャーナリスト
岩城京子

**SPAC-静岡県舞台芸術センターは、本年2月、宮城聰演出『マハーバーラタ』のフランス公演ツアーを行い、各地で大絶賛を受けました。
そこで演劇ジャーナリストの岩城京子さんに、同ツアーの中心であるパリ公演のレポートをお願いしました。**

2月初旬、厳冬のパリに静岡県舞台芸術センター（SPAC）公演チームが30名を超える大所帯で到着したことを在仏日本大使館勤務の友人から聞いた。「同時期に来仏している、坂東玉三郎さんやきゃりーぱみゅぱみゅさんと比較にならない大所帯ですよ」。その一言で、まずはパリが一時的に妙な食い合わせの日本文化バブル状態にあることを知り、さらに、宮城聰が演出する『マハーバーラタ～ナラ王の冒険～』で「人数」が観劇の要になることを予感した。

本作は、06年にパリのケ・ブランリー美術館にてすでに上演された作品だ（03年東京初演）。残念ながら筆者はパリ初演公演を拝見していないが、美術館長のステファン・マルタン氏をはじめフランスの観客に大いに称賛され、再び同美術館にて上演して欲しいという強い要求から、今回の再演が決まったという。

古代インドの叙事詩が平安期の日本に伝播していたら、という着想から創造されたという本作。絶世の美女ダマヤンティ姫（美加理）と勇敢なナラ王（大高浩一）の艱難を乗り越えたすえに結ばれるという恋物語が主軸に据えられてはいるものの、神々、悪魔、貴族、庶民、動物に至るまで種々雑多なキャラクターが話に入り交じるため、下手をすれば、視点が散らばり空中分解してしまいかねない難作だ。だが演出家の宮城は、話者（スピーカー）、演者（ムーバー）、楽器奏者、などによる大人数のチームを音符一つ狂わず見事に指揮し、祝祭的なクライマックスへと観客を導いてみせる。

筆者が観劇したのは、パリ公演最終日。ジャン・ヌーヴェルが必要以上に建築家のエゴを主張した「劇場としてはさぞ使いづらいだろうに…」と思えるケ・ブランリー美術館の地下劇場に降り立つと、まず目に入るのは、中央に堂々と設えられた能舞台を思わせる正方形舞台だ。その傍らには、より小ぶりの正方形の舞台が添えられ、後方にはギリシャのエピダウロス劇場を思わせる急勾配の階段がパースペクティブとして広がる。そして劇場建築、舞台床、階段、のすべての下には能舞台で言うところのお白州とも言える場所が広がり、そこに役者でもある楽器奏者たちがアフリカのジャンベ、カリブのスチールパン、日本の締太鼓など様々な楽器を手にステージを囲む。しかし面白いことに本作では、この建築上のヒエラルキーの底部に陣取る人々こそが、作品全体のリズムを司ることになる。

公演当日、本作の舞台美術を見て「（モーリス）ベジャールの『ボレロ』と似ているね」とささやく客がいた。だが宮城の舞台は、実はベジャールのそれと似て非なるものだと言える。『ボレロ』では、ジョルジュ・ドンであれシルヴィ・ギエムであれ、中央で踊るメロディが先に主旋律を奏ではじめ、それを追いかけるかたちで周囲のリズムが伴奏として乗るわけだが、本作ではこの構図が逆になる。つまり、昆虫や草花といった小さな生命体を示唆するような周りの律動に牽引されるかたちで、古代インドの叙事詩を物語るメロディが紡がれていくのだ。ダマヤンティ姫とナラ王の二人は、物語の主人公ではあるものの舞台の主役ではない。本作で、主役は存在しない。だからこそ、休まず作品を底部から支える100分間のリズムは、最終的に、善神も悪神も貴族も平民もみな平等に飲み込み、全員でセリフを七五調で唱和する実に民主的な大団円を迎えることになる。そしてこの民主的な祝祭を表象化してみせるためには、それなりの頭数が必要とされるわけだ。

欧米の舞台芸術作品の多くはいま、世界同時不況の煽りを受け、また各地の演劇フェスティバルを効率良く巡業することを考え、人・物・金がよりコンパクトに収まるプロダクションを好む傾向にある。端的な例を上げるなら、同月ロンドンで観劇したロバート・ウィルソン作『ジョン・ケージの＜無について のレクチャー＞』では、演出、構成、美術、出演に至るまでほぼすべて、巨匠ウィルソンみずからが行っていた。労働の分配より独占、権力の委譲より統合、役割の折半より集中。1%の富裕層になにもかもが集中する現代社会を象徴するかのように、西欧では演劇界においてさえも（もちろんドイツ語圏演劇などの例外はあるものの）、最終的には、あらゆるパワーが中央の精鋭人員に束ねられる構図がある。特にこの権力の集中傾向は、国立劇場、国立振付センター、国立舞台などが地方に無数に存在しながらも、基本的な文化政策はすべて官僚主導で決定されるフランスにおいてはなおさら強く感じられる。そのようなトップダウン型の組織運営が好まれる国において、宮城率いる30数人のカンパニーは、末端が中央を駆動するボトムアップ型の民衆祝祭劇を上演した。

終演後、冷めていると言われるパリの客にしては珍しく、カーテンコールは三度、四度と続き、宮城が最後に恥ずかしそうに舞台に上がりぺこりと頭を下げるといっそう喝采の音量が上がった。このフランスツアー後、宮城のもとには様々なオファーが海外から舞い込んでいると言う。理解できる話だ。民主主義が崩壊しかけた西欧において、これだけ幸福な民衆演劇を舞台に再生してくれる演出家を、現代のディレクターや観客が放っておくわけがない。

SPAC 2012年 フランス公演スケジュール

パリ
2月6～10日／ケ・ブランリー美術館　クロード・レヴィ＝ストロース劇場
Musée du Quai Branly - Théâtre Claude Lévi-Strauss

ル・アーヴル（フランス北西部）
2月14日／ル・アーヴル国立舞台　ル・ヴォルカン
Le Volcan - Scène Nationale du Havre

ルヴァロワ＝ペレ（パリ近郊）
2月16日／ルヴァロワ＝ペレ劇場
Théâtre de Levallois-Perret

カーン（フランス北西部）
2月20、21日／ノルマンディー国立演劇センター「コメディ・ド・カーン」　エルヴィル劇場
Comédie de Caen - Centre Dramatique National de Normandie - Théâtre d'Hérouville

岩城京子（いわき・きょうこ）
在ロンドン。演劇ジャーナリスト、演劇研究家。1977年、東京都生まれ。世界16カ国で取材をこなし年間100本以上の舞台芸術関連記事を執筆。2013年1月よりロンドン大学ゴールドスミスカレッジ博士課程演劇社会学科在籍。2011年11月、著書『東京演劇現在形：八人の新進作家たちとの対話』出版。2013年5月、フランス Actes Sud 出版より振付家・天児牛大にまつわる著書をフランス語にて発刊予定。

Intérieur

C'est le soir et on voit, à travers des fenêtres, une famille vivre là.
Elle semble tranquille.
Mais ne s'agit-il pas, au-delà des parois dont ces vivants sont entourés, de rendre visible ce qui se cache à l'intérieur de cette "mer de ténèbres" dont parle Maeterlinck, cette zone faite de cavités secrètes en nous qui semblent inatteignables parce qu'elles dépassent aussi bien la vie consciente que la vie inconsciente.
Une cavité noire émet de la lumière. Et ose parler de ce que, de toutes nos forces, nous occultons : la mort.
La mort d'une enfant de cette famille-là.
Cette famille si calme dans l'apparence du bonheur.
Un convoi, une civière qui transporte une jeune morte, sont en route et, inexorablement, s'approchent de la maison.
Et d'ailleurs ce calme de la famille dans la maison n'est-il pas troublé, sans qu'on le sache, par la prémonition que la mort de l'un d'entre eux vient de se produire là, tout près, cette nuit même.
Cette jeune morte, peut-être, a voulu sa mort. Elle a choisi de mourir par l'eau, noyée.
Dans la maison un petit enfant dort et l'arrivée de la civière ne le réveillera pas, tant est forte l'analogie du sommeil et de la mort.
Ce convoi en route c'est le cheminement de la mort en nous.
Maeterlinck associe une parole proche de nous dans l'espace à une image plus lointaine qui, elle, est parfaitement muette. Il rend ainsi très sensible la coexistence de la vie et de la mort. Les deux forces se contrarient et, se contrariant, elles forment une sorte d'alliance, une force nouvelle.
INTERIEUR donne vie et image à cette coexistence essentielle de la vie et de la mort, loin de la peur aveugle.
C'est peut-être la force majeure de Maeterlinck : il nous initie à un monde où l'on peut percevoir au-delà de l'intelligible.

Claude RÉGY, mars 2013

『室内』について

夜。窓の向こうに、家族の暮らしが見える。

平和な暮らしに見える。

だが、これらの生者たちを囲っている壁の向こうに、メーテルリンクがいう「闇の海」の内部に秘められているものを、わたしたちのうちに穿（うが）たれたひそかな空洞がなしている領域を見せなければならないのではないか。この空洞は、意識的な生も無意識の生をも超えているために、到達不可能なようにも見えるだろうが。

空洞の闇が光を放つ。そして、わたしたちが全力で覆い隠そうとしているものについて、口を開いてしまう。死である。

この家族の娘の一人が亡くなった。

平穏そのもので、一見幸せそうなこの家族。

葬列が、亡くなった若い娘を運ぶ担架が、あゆみを進めている。そして容赦なく家に近づいてくる。

そもそもこの家の家族の平穏も、家族の一人が、すぐそばで、まさにこの晩に亡くなるということの予感によって、知らず知らずのうちに乱されていたのではないだろうか。

その若い娘は、もしかすると、自ら死を望んだのかも知れない。娘は水による死を、溺死を選んだ。

家のなかでは小さな子が眠っていて、担架が到着しても目をさまさない。眠りと死との親近性があまりにも強いために。

この葬列の道行きは、わたしたちのうちを行く死の道行きでもある。

メーテルリンクは、空間上わたしたちに近いところで交わされる言葉を、より遠いところで展開する、全く言葉のないイメージと結び合わせた。こうして、生と死との共存を非常に見えやすいものにしている。二つの力は反発しあい、反発しあうことで一種の結合を、新たな力を作り出している。

盲目的な恐怖から遠く離れて、『室内』はこの生と死との本質的な共存を生み出し、それにイメージを与えている。

これがたぶんメーテルリンクの最大の力なのだろう。感性が知的認識を越えていく世界へと、わたしたちを誘ってくれるのである。

©Mario Del Curto

クロード・レジ　2013 年 3 月

室内

Intérieur［Interior］

世界初演

演劇／フランス、日本　Theatre／FRANCE, JAPAN　上演時間：未定　日本語上演

演出：クロード･レジ
作：モーリス･メーテルリンク
訳：横山義志
出演：泉陽二、伊比井香織、大高浩一、貴島豪、下総源太朗、鈴木陽代、たきいみき
布施安寿香、松田弘子、弓井茉那、吉植荘一郎、関根響、朝羽恵（アンダースタディ）

6/15（土）16時開演
6/16（日）17時30分開演
6/22（土）、23（日）16時30分開演
◎6月23日の終演後に、クロード･レジ（演出）と宮城聰によるアーティスト･トークを行います。

一般大人4,000円／大学生･専門学校生2,000円／高校生以下1,000円
☆SPACの会特典のほか、ゆうゆう割引、みるみる割引、ペア／グループ割引料金などがあります。（最終頁参照）

直行バス　渋谷発　劇場直行バスを運行いたします。詳しくはP.46をご覧ください。

舞台監督:内野彰子　演出助手:アレクサンドル･バリー　装置デザイン:サラディン･カティール　装置製作:深沢襟　照明デザイン:レミ･ゴドフロワ　照明操作:神谷怜奈　舞台:佐藤聖　衣裳（ワードローブ）:大岡舞　通訳:浅井宏美、山田ひろ美、原真理子　制作:ベルトラン･クリル、米山淳一　製作:SPAC-静岡県舞台芸術センター、アトリエ･コンタンポラン　協賛:ANA　助成:アンスティチュ･フランセ　後援:在日フランス大使館、アンスティチュ･フランセ日本

Directed by
Claude RÉGY
Written by
Maurice MAETERLINCK
Translated by
YOKOYAMA Yoshiji
Performed by
IZUMI Yoji, IBII Kaori, OHTAKA Kouichi
KIJIMA Tsuyoshi, SHIMOFUSA Gentaro
SUZUKI Haruyo, TAKII Miki, FUSE Asuka
MATSUDA Hiroko, YUMII Mana
YOSHIUE Soichiro, SEKINE Hibiki
ASABA Megu (understudy)
Produced by
SPAC and Les Ateliers Contemporains

■15 June at 16:00
■16 June at 17:30
■22, 23 June at 16:30

Ellipse Theatre DAENDO,
Shizuoka Performing Arts Park
Duration: undecided
In Japanese

感性の臨界へといざなう闇と光･･･そして底知れぬ沈黙･･･。90歳を迎える巨匠クロード･レジがパリと静岡での3ヶ月に及ぶ稽古を経て打ち立てる新たな伝説。

2010年に楕円堂で上演された『彼方へ 海の讃歌（オード）』を観て、レジ作品の魅力にとりつかれた人も多いだろう。フランス国内でも彼はそうやって多くのアーティストに影響を与え、「もう演劇はレジ以外に見る必要はないのではないか」とまで言わせてきた。創作者にとって理想的な環境というここ舞台芸術公園で、レジは1985年のフランスでの上演以来念願の『室内』のリ・クリエーションを、日本の俳優たちと共に試みる。オーディションを経て選ばれた幸運な俳優たちと、飽くなき「実験」をやめないクロード・レジの真っ向勝負。静岡、パリでの凝縮した稽古を経た意欲作を、見逃すことはできない。

みどころ

闇が闇と手をとって現れるならば…我々はどんな小さな光にも希望を見出せるのではないか…。

童話『青い鳥』のイメージとは裏腹に、19世紀末から20世紀にかけて、ヨーロッパ文壇の寵児だったメーテルリンクの初期の作品は、どれも深い闇と絶望に支配されている。1894年に発表された『室内』は、人々の間で生と死を隔てているはずの壁が溶解しゆっくりと両者が入り交じっていくさまを描いている。作家の描いた闇と、その中に蠢くものを見つけ、観るものの感性を拡張するべく演出家が現出させた闇。舞台上の家族を眺めているうちに、観客の目は昆虫を観察する科学者のようにひらかれ、繊細に多くのものを捉えていくはずだ。ほのかな光の中に浮かぶ俳優の一挙手一投足にこそ天佑がある。この闇の織りなすタペストリーは、メーテルリンクと同様に「世紀末」を生き、新たな時代を拓いていく術を模索している現代人にレジが呈する無形の財産となるだろう。（大西彩香）

演出家プロフィール ｜ クロード･レジ　Claude RÉGY

演出家。1923年生まれ。52年から演出活動をはじめ、特定の劇場や劇団に属することなく、独自の理念で、マルグリット・デュラス、ハロルド・ピンター、ヨン・フォッセなど、数多くの同時代作家の作品を上演する。81年以降、パリ国立高等演劇学校（コンセルヴァトワール）で教鞭を執り、また著書によっても若い演出家や俳優に影響を与えている。90年代以降では、ヨン・フォッセ作『だれか、来る』（99）やサラ・ケイン作『4.48サイコシス』（イザベル・ユペール主演、2002）が話題を集め、10年Shizuoka春の芸術祭での初来日公演では、フェルナンド・ペソア作『彼方へ 海の讃歌（オード）』が日本の観客にも熱烈に受け入れられた。

コラム

クロード・レジとの奇跡のような出会い

ベネディクト・ル・ラメール
Bénédicte Le LAMER

クロード・レジの作品は、多くの方にとってはふつうじゃない、見慣れないものだと思います。でも、本当の現実というのは、見慣れていないものなのかも知れません。いずれにしても私にとっては、世界が違って見えるくらいの経験でした。

クロードの作品をはじめに観たときには、ほとんどショックでした。まだクロードの名前も知らないときでしたけど、パリで演劇専門の高校に通っていて、16歳くらいのとき、コメディ=フランセーズでクロード・レジ演出の『出口なし』（サルトル作）を観ました。本当に「何なの、これ！」という感じで、まずは拒否反応でした。それで高校を出てから、一度大学で文学を学んでいたんですが、論文を書いていたらふたたび演劇に興味を持つようになって、ブルターニュ国立劇場付属演劇学校のオーディションを受けました。そこでクロード・レジが教えている、と聞いてはいたのですが、そのときはまだ、観た作品と名前が結びついていませんでした。

クロードとの出会いは驚くべきものでした。クロードの言葉を聞くと、私がずっと一人で探し求めていたものを、耳元でささやかれているかのように感じました。大学時代からメーテルリンクも読んでいましたが、そういった詩人たち、作家たちと私を、クロードが直接に結んでくれるように感じました。クロードの舞台は死の話ばかりなので、こういう話は妙かもしれませんが、私はクロードの舞台に出会ってはじめて、自分が生きている、と感じました。自分の心臓が脈打っているのを感じました。ちょっと啓示を受けたような経験でした。

クロードの舞台はとてもゆっくりで、何もかもが速く進む今の世界では、かなり非日常的な経験をすることになります。詩や芸術というものは、自分のうちに裂け目を生み出すようなものなのではないかと思います。私たちはテレビのニュースで、血が流れるような強烈な暴力を見ることには慣れていますが、それでも言葉が生み出す暴力的な力にはなかなか耐えられません。私たちは日常生活のなかでは、まわりが見えないままに、何かを求めて日々進んでいきます。その何か、真理や現実といったものを、詩や舞台を通じて見つけることもあります。クロードと出会って15年になりますが、今でも発見の連続です。私がこれまで前を向いて生きていくことができたのも、そのおかげなのだと思います。

（構成：横山義志）

ベネディクト・ル・ラメール（Bénédicte Le LAMER）
2000年、ブルターニュ国立劇場付属演劇学校を修了。01年、クロード・レジ演出のコンサート『消えた男の日記』（ヤナーチェク作曲）でデビュー。その後レジ演出『死のヴァリエーション』（ヨン・フォッセ作、03年）、『目的のない男』（アルネ・リグレ作、07年）に出演。03年に自らの劇団を立ち上げ、演出家としても活動している。『室内』創作に先立って行われた俳優向けワークショップでは、長年レジ作品に関わってきた女優として、1ヶ月にわたって講師を務めた。

舞台芸術公園 稽古場棟「BOXシアター」

<クロード・レジ演出舞台映像作品上映会> 神の霧

Brume de Dieu［Mist of God］

舞台映像／フランス Stage Film／FRANCE　上映時間：96分　フランス語上映／英語字幕

監督：アレクサンドル・バリー
舞台演出：クロード・レジ
原作：タリエイ・ヴェースオース（連作『鳥』より）
翻訳：レジス・ボワイエ
出演：ロラン・カザナーヴ
製作：LGMテレビジョン、アトリエ・コンタンポラン
　　エム・メディア

6/9（日） 11時30分上映開始
6/22（土） 10時30分／16時45分上映開始

チケット料金：500円

Directed by Alexandre BARRY
According to "Brume de Dieu" of Claude RÉGY
Excerpt of "The Birds" of Tarjei VESAAS
Translated by Régis BOYER
Performed by Laurent CAZANAVE
Produced by LGM Télévision, Les Ateliers Contemporains, M_MEDIA

■9 June at 11:30
■22 June at 10:30 / 16:45

BOX Theatre, Shizuoka Performing Arts Park
Duration: 96 minutes
In French with English subtitles

クロード・レジは自分の作品を映像に撮ることを、つねに固く禁じてきた。それは、作品の本質が目に見えないものであることを他の誰よりもよく知っているからであり、上演が生み出す捉えがたいもの、それを貫くひそやかな流れは、小さなテレビの箱のなかでは生きつづけることができないということを、他の誰よりもよく感じているからである。
それはレジが、生きる者同士の接触という至上の交流を、まだ信じているからである。同じ空間、つまり上演を経験する空間を共有することで、そこにいる者同士の間に生の流れが生じるということを。
だが一度だけ、レジがこの規則に例外を認めたことがある。それが、私がレジについて、レジとともに製作した『クロード・レジ、世界の火傷（Claude Régy, la brûlure du monde）』（2005）である。
私たちはともにこの作品の映像を観て、舞台の上で練り上げられた作品を、テレビ映像とは対極的な形で、イメージとして再構成する方法を見出すことが可能なのではないかと感じた。そしてそのためには、映画の技術を活用することで、生きた素材を、その息づかいを変質させないままに、映像素材に移し替える方法を探らなければならないと感じた。
問いつづけ、探りつづけること。映像に収めるのではなく、再創造すること。それが、作品を裏切らないための必要条件だった。
私たちは、この経験を経て、『神の霧』という舞台作品をもとにした映画を構想するに至った。これはレジの作品を全体として再構成する、最初の、そしておそらくは唯一の映画である。
この映画の中心は、クロード・レジの演出である。これは複数の出会いでもある。クロード・レジと、詩人タリエイ・ヴェースオースの、運命的な出会い。そして俳優ロラン・カザナーヴとの、やはり運命的な出会い。クロード・レジは数年前に、俳優養成のためのワークショップのなかで、この俳優と共同作業をしていたのだった。
この映画は、自らの芸術の絶頂にある偉大な演出家と、感性の巨人によってなされた驚くべき詩の融合として構想された。
透明な混沌の中で混じり合う、二つのラディカルな感性の重ね写しとして。
映画の夢として。

アレクサンドル・バリー

あらすじ

夏の盛り。マティスは仕事がなく、干し草刈りばかりしている。ある日、彼はヤマシギが石に打たれて死んでいるのにショックを受け、それを妹ヘグに話すがバカにされてしまう。別の日、マティスは妹に湖で魚を釣ってきてと頼まれる。舟を出し、遠くを眺めていると、次第に水が入ってくる。マティスはそれに気づくが、魚のことを考えたり、前の晩の妹との出来事を考えたりしてしまう…。

©Thomas Aurin

静岡芸術劇場

脱線！スパニッシュ・フライ

日本初演

Die (s)panische Fliege［The Spanish Fly］

演劇／ドイツ Theatre／GERMANY　上演時間：120分　ドイツ語上演／日本語字幕

演出・美術：ヘルベルト・フリッチュ
原作：フランツ・アルノルト、エルンスト・バッハ
出演：ヴォルフラム・コッホ、ゾフィー・ロイス、マンディ・ルドスキ、ハンス・シェンカー、インカ・レーヴェンドルフ
ヴェルナー・エング、クリストフ・レトコフスキー、ハラルド・ヴァルムブルン、シュテファン・シュタウディンガー
クリスティーネ・ウルシュプルーフ、バスティアン・ライバー、ベティー・フロイデンベルク
製作：ベルリン・フォルクスビューネ

6/8（土）、6/9（日） 15時開演
◎終演後にヘルベルト・フリッチュ（演出・美術）と宮城聰によるアーティスト・トークを行います。

一般大人4,000円／大学生・専門学校生2,000円／高校生以下1,000円
☆SPACの会特典のほか、ゆうゆう割引、みるみる割引、ペア／グループ割引料金などがあります。（最終頁参照）

直行バス　渋谷発　浜松発　劇場直行バスを運行いたします。詳しくはP.46をご覧ください。

衣裳：フィクトリア・ベーア　音楽：インゴ・ギュンター　照明：トアシュテン・ケーニッヒ　音響：エアヴィン・シュターヘ　ドラマトゥルギー：ザブリナ・ツヴァッハ
特別協力：ドイツ連邦共和国大使館、東京ドイツ文化センター

Directed and stage designed by
Herbert FRITSCH
Written by
Franz ARNOLD and Ernst BACH
Performed by
Wolfram KOCH, Sophie ROIS, Mandy RUDSKI
Hans SCHENKER, Inka LÖWENDORF
Werner ENG, Christoph LETKOWSKI
Harald WARMBRUNN, Stefan STAUDINGER
ChrisTine URSPRUCH, Bastian REIBER
Betty FREUDENBERG
Produced by
Volksbühne am Rosa-Luxemburg-Platz, Berlin

■8, 9 June at 15:00

Shizuoka Arts Theatre
Duration: 120 minutes
In German with Japanese subtitles

Bundesrepublik Deutschland Auswärtiges Amt　GOETHE INSTITUT

来日公演記念トークショー
『脱線！スパニッシュ・フライ』にみる
鉄板！ドイツ王道喜劇論
～民衆劇場・フォルクスビューネ、「笑い」の主成分～

ドイツ演劇の専門家とSPAC俳優の異色コラボで、
話題作を一足先に大解剖！
出演：市川明（ドイツ文学・ドイツ演劇研究者／大阪大学）
三島景太（SPAC俳優）
司会：横山義志（SPAC文芸部）

5/11（土） 14時［入場無料］
東京ドイツ文化センター（東京都港区赤坂7−5−56）
5/12（日） 14時［入場料500円］
サールナートホール（静岡市葵区御幸町11−14）
奥野晃士（SPAC俳優）による、「動読的」せかい演劇祭ラインナップ紹介あり。

主催：SPAC-静岡県舞台芸術センター、東京ドイツ文化センター、静岡シネ・ギャラリー、アルテステ　協力：有限会社サイズ　お問い合わせ：SPACチケットセンター　TEL. 054-202-3399

ベルリンでは全公演ソールドアウトの快挙！ヘルベルト・フリッチュが大ヒット作を引っさげて日本初上陸！

ドイツを、そしてヨーロッパを席巻した大ヒット作が日本初登場！しかもベルリン市民を熱狂させた本作は、ここ静岡でしか観ることができないのだ。ヘルベルト・フリッチュは、60代で本格的に演出を始めるまで、老舗の劇団フォルクスビューネの主要俳優だった。そのためか彼の演出では、俳優たちは全身を使ったパワフルな演技で観客の“笑いのツボ”を押しまくり、「理屈っぽい」と言われるドイツ演劇のイメージを刷新した。勢いに乗る彼はドイツ語圏演劇ベスト10が選ばれるベルリン演劇祭（テアタートレッフェン）に、昨年・今年と合わせて三本の作品を送り出している。本作はその最新作となる。

爆笑また爆笑！ドタバタ喜劇の醍醐味が思いきり楽しめる。ドイツの名優たちによる「体当たりのボケ」を見よ！

文句なく面白い！これぞドタバタ喜劇の醍醐味！派手なアクションや軽妙なやり取りは、言葉も国も超越する。大きなカツラ、けばけばしい色のドレスに包まれた俳優たちの身体が、巨大なペルシャじゅうたんの襞から現れては、まるでスーパーボールのように宙を跳ね、大げさな叫び声や「変な顔のヤツ」が終始舞台を駆け巡る。「スパニッシュ・フライ」とは、ツチハンミョウ科の甲虫から精製される催淫剤の名前でもあるが、この舞台はその名に相応しく観客たちを幻惑し、骨抜きにしてしまうだろう。洗練された肉体から乱れ打ちのように繰り出されるボケのボディブローに、あなたも撃沈必至！

みどころ

世紀を超えて社会秩序を笑い飛ばす、マジカル・ヒステリー・ツアー！

「スパニッシュ・フライ」は、アルノルトとバッハの喜劇作家デュオによって、第一次世界大戦前夜に書かれた。20世紀初頭のヨーロッパらしく社会道徳を風刺したドタバタ劇で、誤解と取り違えによる喜劇の古典的なスタイルで書かれている。80年代にテレビ放送もされたというこの笑劇を、メディアアーティストでもあるフリッチュは鮮やかに蘇生させた。この作品を観るとき人は自分の陥っている「タブロイド思考」について考えさせられる。いかなる問題も単純化し、スマホの画面の中に収められると思ったら大間違いだ。自分のソーシャルメディアを流れて行く情報だけが世界の潮流ではないと気づき、「脱線」していく勇気を持たなければ行き着く先はパニックのただ中かもしれない。時代に棹さすかのように大仰な遊戯を繰り広げて、フリッチュは人形の如き小市民たちを文字通り笑い飛ばしていく。（大西彩香）

©Thomas Aurin

©Thomas Aurin

あらすじ

カラシ工場の経営者ルートヴィヒには、秘密があった。若かりし頃、妻に隠れて「スパニッシュ・フライ」と呼ばれる踊り子と関係を持ち、今も子どもの養育費を支払っているのだ。妻のエンマは道徳観念の固まりで、彼女が会長を務める「母性保護同盟」の同志マチルダの息子ハインリヒと、自分の娘を結婚させようとしているが、娘のパウラは若い弁護士ゲルラッハと愛し合っている。ゲルラッハがルートヴィヒの秘密をばらしたものだから、エンマは「事の真相」を暴こうと大騒ぎ。ルートヴィヒの方は、ハインリヒを自分の隠し子だと思い込み…。

©Thomas Aurin

演出家プロフィール ｜ ヘルベルト・フリッチュ　Herbert FRITSCH

演出家、俳優、マルチメディア・アーティスト。1951年アウクスブルク（バイエルン州）生まれ、ベルリン在住。ミュンヘンのオットー・ファルケンベルク学校で俳優教育を受け、ドイツをはじめとして、複数の国で俳優として活躍。1990年から2007年にはベルリン・フォルクスビューネに所属し、フランク・カストルフらの作品で大きな役割を担っていた。同時に映画監督として、「hamlet_X GbRプロダクション」を起こし、60本ほどの短編映画と1本の長編映画を製作。09年にはオーバーハウゼン国際短編映画祭で回顧特集上映も行われた。フリッチュが開発し、特許を取った3Dの特殊技術による作品の展覧会も、ドイツやスイスなど各地で行われている。

慌てふためく ヒゲとバインダー

伸井太一
NOBII Taichi

『脱線! スパニッシュ・フライ』（原題：Die [s]panische Fliege）には、ダジャレが仕掛けられている。Sを取り除けば「パニッシュ（panisch）」=「パニックの」という意味になるのだ。

本作は実にパニックそのもの。表情やセリフもみな、狂気じみている。だが、本劇が初演された100年前、1913年のドイツも混沌とした社会であり、翌年には、まさに混乱に満ちた大戦争（第一次世界大戦）を開始することとなる。

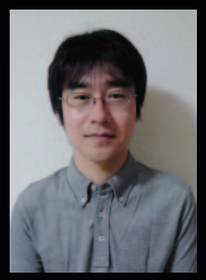
『脱線! スパニッシュ・フライ』のパニックの源泉は何なのだろうか。1871年にフランスとの戦争に勝利し、ドイツ帝国が誕生し、産業革命によって繁栄を極め、医科学も飛躍的に発展した。「ドイツの医学薬学は世界一イイイイ」という某マンガのセリフは、まさにここに端を発している。同時に、医学は様々な「混乱」をもたらした。精神医学の発展は「狂気」を発見し、人の心は分析される対象となり、薬物による心の操作の可能性も開かれた。この「こころ」観の大変化は、この演劇の主題ともいえる。

また、豊かさは徐々に身分や男女差の垣根を崩していく。そこで男は、立派なヒゲでも生やして虚勢を張るしかない（当時のドイツは空前のヒゲ・ブーム！）。そしてヒゲのルートヴィヒが大事に抱えるのは、書類整理バインダー。これは1886年にドイツで発明された物で、ドイツ語でOrdner（オルドナー）、つまり「整頓（秩序）」の意味合いを持つ。そして、そんなバインダー（秩序）にファイルされた秘密が漏れ出す…。

これらのキーワード「医科学」や「秩序」は、日本人の多くが持つドイツ像そのものだ。だからこそ、それらがメチャクチャ（パニック）になることが笑いのツボだといえる。他のドイツ像といえば、ビール、ソーセージ、サッカー、クラシック音楽などなど。しかし、その中に「ドイツ=お笑い」は無く、「ドイツ=お堅い」というイメージが支配的だろう。確かにドイツは笑いさえもお堅い部分もある。だが、そんな笑いこそが、どことなく間抜けであり楽しい。

2013年が、日本にドイツの笑いが定着する最初の年になるように心から願いたい。それが静岡の公立劇場が主催する演劇祭から始まるなんて、なんだかステキな話だと思う。

©Thomas Aurin



伸井太一（のびい・たいち）
ライター（ドイツ製品史・サブカルなど）。現在、東海大学文学部ヨーロッパ文明学科講師としてドイツ近現代史を教える。著書は東西ドイツの製品文化をポップに扱った『ニセドイツ』シリーズ（社会評論社）。静岡市では映画イベントなどにも出演。

広告

Georg Büchner im 21. Jahrhundert
Veranstaltungsreihe des Goethe-Instituts Japan zum 200. Geburtstag von Georg Büchner

21世紀のビューヒナー
ドイツ文化センターによるゲオルク・ビューヒナー生誕200年記念企画

23歳4ヶ月という
あまりにも短い、
しかしすべてが
凝縮した生涯を
駆け抜けた
ゲオルク・ビューヒナー
その生の軌跡をたどり、
3篇の戯曲と
1篇の短編小説という
数少ない、しかし
200年という時を経て
今なお輝き続ける
作品の魅力を
21世紀の視点から
再発見する試み

地点 リーディング『レンツ』
演出：三浦基
2013年9月6日(金)／7日(土)
ゲーテ・インスティトゥート・ヴィラ鴨川
9月13日(金)／14日(土)
東京ドイツ文化センター

〔関連企画〕
読書会『レンツ』を読む（全3回）
5月30日(木)、6月27日(木)、7月25日(木)(予定)
東京ドイツ文化センター

映像で見るドイツのビューヒナー新演出
2013年秋、東京ドイツ文化センターと
関西会場（場所未定）にて上映予定

〔協力企画〕
富士山アネット×富士山アネット／Manos.
[Woyzeck／W](仮)
構成・演出・振付 長谷川寧
9月13-23日 東京/こまばアゴラ劇場（予定） 9月下旬 京都公演（予定）
1つの戯曲[ヴォイツェク]をダンスと演劇の2作品で同時上演する企画
富士山アネット http://fannette.net/

清流劇場『ヴォイツェク ver. Fukushima』
演出 田中孝弥
6月 ギーセン（ドイツ） 10月 関西公演（予定）
ビューヒナーゆかりの町で開催されるビューヒナー・フェスティバルへの招聘公演
清流劇場 http://seiryu-theater.jp/

詳細はドイツ文化センターならびに各団体のHPにて確認ください。

GOETHE INSTITUT
東京ドイツ文化センター Tel. 03-3584-3201 info@tokyo.goethe.org http://www.goethe.de/tokyo
大阪ドイツ文化センター Tel. 06-6440-5900 info@osaka.goethe.org http://www.goethe.de/osaka

© La Pendue

グランシップ広場

ポリシネルでござる!

日本初演

Poli dégaine［Punchy draw］

人形劇／フランス Puppetry Theatre／FRANCE　上演時間：50分　フランス語・日本語上演

演出・出演：エステル・シャルリエ、ロミュアルド・コリネ
構成・美術：ロミュアルド・コリネ
人形製作：エステル・シャルリエ
アドバイザー：ロマリック・サンガール
製作：ラ・パンデュ

Directed and performed by Estelle CHARLIER and Romuald COLLINET
Creation and scenography by Romuald COLLINET
Puppets by Estelle CHARLIER
Counsellor about everything and nothing by Romaric SANGARS
Produced by La Pendue

■1 June at 14:00 / 17:00
■2 June at 12:30 / 15:00

Granship Square
Duration: 50 minutes
In French and Japanese

6/1（土） 14時／17時開演
6/2（日） 12時30分／15時開演

チケット料金:500円 ※未就学児は無料となります。

※やや刺激の強い表現がございます。
※乳幼児とのご観劇の際には、ほかのお客様の鑑賞のさまたげにならないようにご配慮ください。

グランシップ広場

美しい芝生とインターロッキングで仕上げられた広場。グランシップに訪れた人々の憩いと安らぎの場です。JR東静岡駅南口より徒歩2分、グランシップ西側。

直行バス　渋谷発　三島・沼津発　劇場直行バスを運行いたします。詳しくはP.46をご覧ください。

後援:在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

気をつけろ! ポリシネルはただの人形じゃない。人形使いさえあやつってしまう、トンデモナイやつ――。

グランシップ広場にポリシネルの標的となった人々の笑い声が響き渡る! 黒いマスクにだぶだぶの服を身につけ、観客席に向かって大人も子どももおかまいなしに笑いの砲弾を放つ、ポリシネル。2人の人形使いは、言うことをきかないポリシネルに手を焼きながら、自分たちも抑制のきかない情熱で抱腹絶倒のパフォーマンスをやってのける、かなりの危険人物達だ。3人（?）の熱狂的エネルギーと爆発的な「しゃべりズム」があなたを浮かれ騒ぎの狂乱へと誘う。一度スイッチが入ったらもう止められない!

世界のオトナもコドモも大笑いした「ちょいワル」ピエロの不思議な人形劇が日本初上陸!

人形劇イコール「子ども向け」だと思って観に行くと、その不道徳さと俗悪なバイタリティにびっくり! でもどこの国の子どもたちも大喜びだ。だって子どもが“お下品なネタ”を好むのは世界共通だから。ポリシネルは人気者、でも正義の味方じゃない。常にドタバタ走り回り、ボコボコ殴られている。大笑いしながら、私たちは気づくのだ。戦争、疫病、災害、革命…様々な困難を実は乗り越えながら、ポリシネルは今日も生きている。爆笑のうちに、あなたの心の暗いところにもスポットライトをあてている、そんな不思議な人形劇。

みどころ

人々を魅了し続ける詩的ミステリー、人形劇の深淵を探るラ・パンデュの舞台

「ポリシネル」はもともとコメディア・デラルテの主要なキャラクターで、イタリアでは「プルチネッラ」、イギリスでは「ミスター・パンチ」として名を馳せる、欧州一有名な人形劇の主役である。浜辺にしつらえられた紅白の小さな舞台で上演される「パンチ&ジュディ」に、海水浴客たちが群がっている光景は、イギリスの伝統的な夏の風物詩でもある。この好き放題で荒唐無稽な人形劇を観て大人も子どもも、一緒になって手を打って笑う。ヨーロッパの宗教的背景を考えると、社会生活の中で抑圧された人々のエネルギーがはけ口を求めてポリシネルの活躍を支持し、破天荒な迫力を持たせていったのだろう。2003年にグルノーブルで活動を開始したラ・パンデュのふたりは、以来「ポリシネル」とともに国内外を旅してきた。ポリシネルに出会うまでにも、実はパフォーマーとしての多くの経験を積んできた使い手であり、人形を操り操られる彼らの動きそのものも魅力的である。（大西彩香）

© Denis et Christelle GREGOIRE

© Denis et Christelle GREGOIRE

あらすじ

お尋ね者の人形使いが2人、大きな荷物を抱えてやってきた。運んでいるのは、世界一危険な操り人形「ポリシネル」。人形使いは派手な動きで「史上最高のパフォーマンス」の開催を人々に告げるのだが、何ひとつ予想通りには運ばない。ポリシネルはうたた寝を始めてしまうし、彼をやる気にするために犬や雌鶏、ジゴーニュおばさんとその22人の赤ん坊、警察官、ガイコツまでが駆り出されるが、ことごとく失敗に終わってしまい…。

劇団プロフィール ｜ ラ・パンデュ　La Pendue

フランスの人形劇団「ラ・パンデュ」はシャルルヴィル・メジエール国立人形劇学校出身の人形使いである、エステル・シャルリエとロミュアルド・コリネの二人組のグループ。2003年よりグルノーブルにて活動を開始。主に、下から手を入れて操る手袋型の人形を使い、400年の歴史をもつキャラクター「ポリシネル」を題材にした本作のほか、書き下ろしの新作も発表している。現在はグルノーブル近郊の小村にアトリエをかまえ、ワークショップなどを行う一方、スペイン、スイス、ベルギー、ドイツ、アメリカ、エジプトなど世界各国での公演を重ねている。

© Denis et Christelle GREGOIRE

クスクス「ラ・パンデュ」推薦文

伊藤 晃
ITO Akira

2006年9月、フランス北東部の都市シャルルビル・メジエールで行われた世界人形劇フェスティバルに出かけた。10日間の期間中に150本近くの人形劇が上演される世界最大のフェスティバルである。

そこで「ラ・パンデュ」というグループの「ポリシネルでござる！」という人形劇を観た。

ヨーロッパには乱暴で怠け者の道化が活躍する伝統的な人形劇が各地にある。イタリアでは「プルチネラ」、イギリスでは「パンチ」、そしてフランスでは「ポリシネル」。民衆の気軽な娯楽として、時には権力への風刺や支配への抵抗として、いつも身近にあった人形劇。ヨーロッパの古典的人形劇が、現代の日本人でも楽しめるだろうか。観劇前の心配は杞憂であった。

古いアパートの中庭にしつらえられた伝統的な形式の舞台で、人形を操るのは若い男女。

劇は道化のポリシネルと恋人、赤ん坊と犬と警官と死神といったお馴染みの連中が入り乱れ、司会役の男とポリシネルが掛け合いをしながら、テンポよく進行する。

人形の扱いが見事だ。途中の大立ち回りには、僕も人形遣いだから可能なのはわかるが、同じ人形遣いだからこそ唖然とした。SF映画のパロディや台湾風な立ち回りも取り混ぜながら、子どもは大笑い、大人は眉をひそめながらも拍手喝采である。

内容はお下品で不道徳、しかしそれが不快に感じられないセンスの良さがある。「伝統」としてカギ括弧でくくられるのを許さず、抑圧されたエネルギーの捌け口として現代に再生されていた。

人形劇には、こんなにも力があった。僕らはいつのまにか限界を規定してはいなかったろうか。

以来、「ポリシネル」は僕の目標である。

終演後にサインをもらったポスターは、いまも稽古場の壁に架かっている。

このたび静岡県舞台芸術センターの招きで来日するという。秋田から馳せ参じたいところだが、自分たちの初日が直後に控えている。
さて、僕は当日の客席に座っていられるだろうか。

© Denis et Christelle GREGOIRE

伊藤晃（いとう・あきら）
人形劇団クスクス代表。2007 年に秋田県でうまれたプロ劇団。「クスクス」という小さな声を大切に、面白くて楽しい人形劇をしてゆきたいと願っています。秋田、岩手、山形など東北を中心に、全国で公演しています。

広告

MATHILDE MONNIER
マチルド・モニエ
PUDIQUE ACIDE / EXTASIS
ピュディック・アシッド／エクスタシス

IF 2013 JAPON MÉDITERRANÉE 地中海の世界

PREMIERE TOURNEE AU JAPON
初来日公演

26 et 27 octobre 2013 : Triennale d'Aichi 2013
2013年10月26日-10月27日 : あいちトリエンナーレ2013

2 novembre 2013 : DANCE BOX / ArtTheater dB KOBE
2013年11月2日 : DANCE BOX / ArtTheater dB 神戸

9 novembre 2013 : Saitama Arts Theater
2013年11月9日 : 彩の国さいたま芸術劇場

informations/お問い合わせ :
www.institutfrancais.jp

INSTITUT FRANÇAIS
アンスティチュ・フランセ日本
JAPON

EU JAPAN Fest
LOUVRE ルーヴル 美術館展
db Dance Box
AICHI TRIENNALE 2013

©Yusuke AOKI

舞台芸術公園 稽古場棟「BOXシアター」

Waiting for Something

静岡初演

（サミュエル・ベケット『ゴドーを待ちながら』より）

Waiting for Something (Inspired by *Waiting for Godot* by Samuel BECKETT)

演劇／日本、韓国 Theatre／JAPAN, KOREA　上演時間：約50分　日本語・韓国語・英語上演／日本語・韓国語・英語字幕

作・演出：中野成樹
原作：サミュエル・ベケット
出演：チェ・ナラ（ソウル市劇団）
　　村上聡一（中野成樹+フランケンズ）
　　石橋志保（中野成樹+フランケンズ）
　　キム・ソンヒョ（コムンゴ独奏、ソウル市国楽管弦楽団）
初演：アジア舞台芸術祭2011

6/15（土） 13時30分開演
6/16（日） 12時／16時開演
◎6月15日の終演後に中野成樹（作・演出）と宮城聰によるアーティスト・トークを行います。

一般大人2,000円／大学生・専門学校生・高校生以下1,000円

直行バス　渋谷発　劇場直行バスを運行いたします。詳しくはP.46をご覧ください。

字幕翻訳（韓国語）：金恵玲　字幕翻訳（英語）：新藤敦子
後援：駐日韓国大使館 韓国文化院

Written and directed by
NAKANO Shigeki
Inspired by
Samuel BECKETT
Performed by
CHOI Na Ra (Seoul Metropolitan Theatre)
MURAKAMI Soichi (Shigeki NAKANO + Frankens)
ISHIBASHI Shiho (Shigeki NAKANO + Frankens)
KIM Seon Hyo (Geomungo, Seoul Metropolitan Traditional Music Orchestra)
World premiere:
Asian Performing Arts Festival 2011
Special Thanks to
Sejong Center for the Performing Arts

■15 June at 13:30
■16 June at 12:00 / 16:00

BOX Theatre, Shizuoka Performing Arts Park
Duration: 50 minutes (expected time)
In Japanese, Korean and English
with Japanese, Korean and English subtitles

いま東京の演劇シーンで注目を集める「中野成樹+フランケンズ」。韓国の演劇人・ミュージシャンとのコラボレーションが新境地を生んだ！

本作は、アジアの各都市から若手のアーティストが集まって共同制作を行う「アジア舞台芸術祭」の企画において、3年の月日をかけて創作され、同芸術祭での上演で大きな注目を浴びた。テーマはずばり「待つこと」。翻訳劇を得意とする演出家らしくベケットの『ゴドー待ち』に着想を得て、自ら脚本を書き起こした。男と女のちぐはぐな会話の果てに「待ち続けた何か」はやってくるのか。気軽に楽しめて、その世界は意外と深い。韓国の女優や音楽家とのコラボレーションが切り拓かせた、中野成樹の新たな境地！

待つものなど何もない筈の僕たちは、それでも何かを待ち続けている…。わかりあえない時代に捧げる、言語も国境も超えた新しい「愛」。

「通じない」ということは、こんなにも滑稽なのか？「言葉の壁を楽しく扱いたい。」中野成樹のスタート地点はそこだったという。そしてすぐに気付く、「壁は言葉だけじゃない」。性別、年齢、世代、そもそも「生理的に嫌！」等々…。どうせ壁は存在する。だったらそれを敢えて感じられるものにしてみよう。そうしたら、こんなおかしな舞台が出来上がった。日常のコミュニケーションの煩わしさに悩んでいる現代人も、もどかしさを乗り越えて訪れるささやかな「疎通」に、心の底で快哉を叫ぶに違いない。

みどころ

「東京ローカル」の演劇者が饗する絶妙の「ポタージュ・スープ」を賞味せよ

独自の文化形成による地域の活性化がある種トレンドになっている昨今だが、東京で演劇を創る中野には「都市ローカル」という意識がある。海外の戯曲を自ら翻訳し、大胆な意訳と意図的な誤訳で斬新にアレンジし“おかしみ”を付加する――本人が「誤意訳」と名付ける手法によって生じるドメスティックな面白さが売りのナカフラ芝居が、ここにきて東京という地方の演劇として海外でも受け容れられると確信を持ったようだ。都市に生きる人々が折り合っていく消費社会と薄刃で対決しつつも、日常を切り取るまなざしが温かいのは、中野が自分の住まう地域への誇りを持っているからに他ならない。世界に出て行く価値はここにある。世界の巨匠が居並ぶ「ふじのくに⇄せかい演劇祭」は演劇のフルコース。中野は東京とソウル、二都市から丁寧に材料を選び、瞬時に惚れ込んだというコムンゴ（玄琴）の格調ある響きをスパイスに、3年かけて仕込んだ極上のスープで観客を饗応する。（大西彩香）

©Yusuke AOKI

©Yusuke AOKI

あらすじ

ある女の所に男がやってくる。が、言葉は通じない。男は携帯電話の充電をしたいと言うが女は誤解し、唯一通じた単語から男がイタリアのミュージカル俳優だと思い込み、部屋に迎え入れる。2年が経過する。携帯の充電はまだ終わらない。女は男が俳優ではなく、自分をヴェニスに連れて行ってくれはしないだろうと気づいているが、一緒に暮らし続けている。そこへ男の妻が現れる。今度は同じ言語を使うのに話が通じない…。

演出家プロフィール ｜ 中野成樹（なかの・しげき）

1973年東京生まれ。演出家。中野成樹+フランケンズ主宰。有明教育芸術短期大学講師。近年の行い：動物園にてオールビー『動物園物語』を動物見学付きで上演（『ZooZoo Scene ずうずうしい』2008,2009）／チェーホフ『かもめ』をラップチューン化、CDリリース&音楽ライブ/舞台パフォーマンス（『長短調』2010）／児童館で演劇活動その記録を作品化、東京/メルボルンで上演（『Powerhouse』2012）／『かもめ』をTwitter上で2年間かけ上演中（『つぶやくかも、め』2012-）／短中編連続上演で全国巡回（『ナカフラ演劇展』2012-2013）／など。http://frankens.net/

コラム

『Waiting for Something』上演に寄せて

徳永京子
TOKUNAGA Kyoko

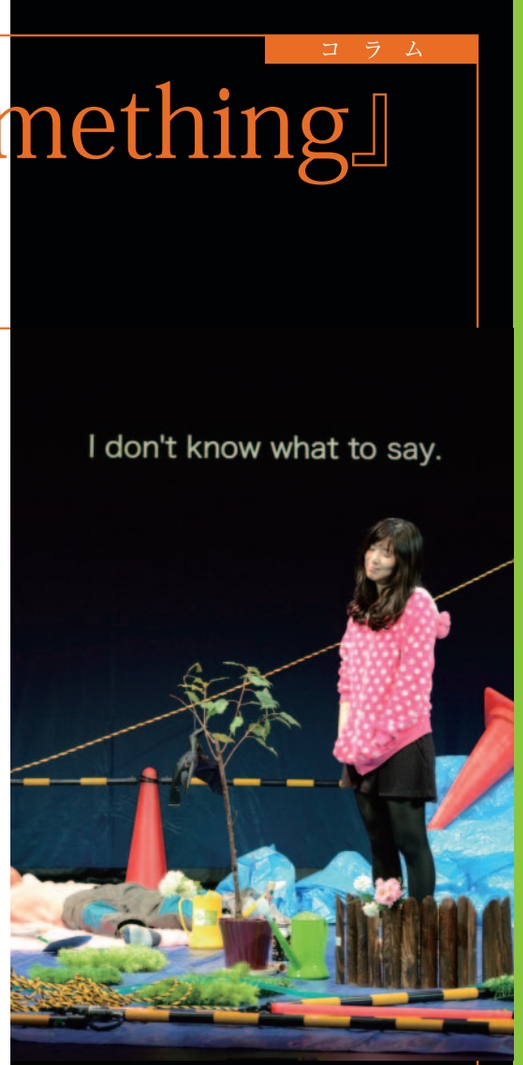
少しマニアックな話をします。

カーネーションという日本のロックバンドがいます。インディーズ時代も含めると活動は30年、さまざまな紆余曲折を経て自分達のペースで活動できる地盤をつくり、昨年出したアルバムは、軽やかな現役感と迫力ある成熟度が見事に融合したしびれる傑作でした。一般的な知名度は高くありませんが、ロック好きやミュージシャンから深い愛と尊敬を集めています。このバンドのフロントマン、直枝政広さんがかつてインタビューで「あなたにとってロックって何ですか?」と聞かれて答えた「家にある僕のレコード棚です」という言葉に私は感銘を受け、後日、中野成樹さんを思い出すようになりました。

つまり直枝さんの答えは、過去と表現の理想的な関係のように私には聞こえ、演劇でそこにいるのは中野さんだと思うのです。大好きな作品、影響を受けた人、それらを生み出しては消えていった先人と長い歴史……。そうしたあれやこれを今の自分を通してアウトプットする。アウトプットされた作品はシンプルで肩の力が抜けているけれども、その余白には、圧縮された時間や重ねられた推敲が透明な結晶としてあちこちに存在する。それは同時に、アウトプットした主体が演劇そのものになることをも意味します。

中野さんは、中野成樹+フランケンズ、通称ナカフラという劇団を主宰し、独自のスタイルで既存の戯曲を演出しています。それはしばしば“誤意訳”という中野さんの造語で説明されますが、芯にあるのは「有名戯曲をこう変えたらおもしろい」とか「ここまでやっても名作は価値を失わない」といった外部からの好奇心ではなく、「ここさえ押さえてあればいいんだよ」という演劇の歴史からの応答です。それがたとえどんなに大胆なアレンジでも、中野さんは演劇そのものなので許されます。

『Waiting for Something』は、不条理劇の金字塔『ゴドーを待ちながら』が原作ですが、かなりねじれの効いたアレンジが施されています。でもベケットは、あの難解な『ゴドー〜』の登場人物を当時の有名コメディアンに演じてほしかったそうなので、そのスラップスティックぶりはきっと望むところでしょう。



©Yusuke AOKI

徳永京子（とくなが・きょうこ）
演劇ジャーナリスト。朝日新聞劇評の他、公演パンフレットや雑誌、web媒体などにインタビュー、寄稿文、作品解説などを執筆。東京芸術劇場運営委員および事業企画委員。

かえっこバザール

おもちゃやアクセサリー、絵本などを持って劇場に集まろう!!

6/2（日）
11時〜14時30分
静岡芸術劇場
参加資格はこどもとこどもの心を持った人!

世界共通のこども通貨「カエルポイント」で、遊ばなくなったおもちゃ等をこども同士で循環させる――「かえっこバザール」が「ふじのくに⇄せかい演劇祭」に初登場！「かえっこ」は、美術家・藤浩志氏（十和田市現代美術館副館長）により発案されたシステムです。2000年3月、福岡アジア美術館1周年記念事業の中で誕生し、国内外の美術館や、学校、公園、公民館など、今日も全国のどこかで「かえっこバザール」が開催中！

「かえっこ」についての詳細は、開催情報サイト http://kaekko.exblog.jp/ をご覧ください。

かえっこバザールの遊び方

遊ばなくなったおもちゃ アクセサリー 絵本が
- ある → 「かえっこバンク」で「カエルポイント」に交換
- ない → ワークショップやお手伝いに参加して「カエルポイント」をためる

→ ほしいおもちゃと「カエルポイント」を交換

戸田書店×ＳＰＡＣ ブックフェア2013

SPAC堂書店 開店!

もしも劇団ＳＰＡＣが本屋さんを作ったら――

宮城聰（SPAC芸術総監督）とSPACの俳優・スタッフたちが選んだオススメ本が、戸田書店静岡本店の特設コーナーに並びます。名づけて「SPAC堂書店」！ 演劇書からコミックまで、ジャンルも多彩！ 俳優たちのプロフィールなどもチェックでき、SPACの新しい一面をご覧いただけます。駅前の「葵タワー」内の同書店、階上には人気のスポット・静岡市美術館もあり、アートな空気がいっぱいです。

会場：戸田書店静岡本店２階　特設コーナー
〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー内
TEL.054-205-6111（代）
営業時間：10時〜21時

5月中旬より開始予定
（詳細はSPAC公式サイトをご覧ください）

あなたの演劇批評をお寄せください!

深蒸し茶流 劇評塾

批評することも「演劇活動」のひとつです。皆様のご応募をお待ちしています！

「ふじのくに⇄せかい演劇祭2013」の全ての演目で、一般の皆様からの劇評を募集します。ご投稿いただいた劇評をSPAC文芸部（大澤真幸、大岡淳、横山義志）が講評します。

- ●入　選……原稿料10,000円をお支払いし、SPAC公式サイトに劇評を掲載。SPACの公演に1回分ご招待。
- ●準入選……SPAC公式サイトに劇評を掲載。（原稿料はなし）
- ●3回入選で 劇評塾を卒業。プロの書き手としての活動をSPACが応援。

字数：2,000字程度
締切：批評対象の舞台を観劇後10日以内
投稿方法：E-mailまたはFAX・郵便（封書）でお送りください。E-mailの場合は件名欄に、FAXの場合は1ページ目の冒頭に、郵送の場合は封筒の表書きに、「投稿劇評」と必ずお書きください。
E-mail：mail@spac.or.jp　FAX：054-203-5732
住所：〒422-8005静岡市駿河区池田79-4　静岡県舞台芸術センター 劇評係
※原稿には住所、氏名（ペンネームの方は本名・ペンネーム両方）、電話番号・E-mail等複数の連絡先、観劇日を明記してください。

SPAC公演の劇評は、SPAC公式サイトでご覧いただけます。
http://www.spac.or.jp　SPAC　検索

©Natalia Kabanow

静岡芸術劇場

母よ、父なる国に生きる母よ

日本初演

Utwór o Matce i Ojczyźnie［A Piece on Mother and the Fatherland］

演劇／ポーランド Theatre／POLAND　上演時間：90分　ポーランド語上演／日本語字幕

演出・翻案・編曲：ヤン・クラタ
原作：ボジェナ・ケフ
出演：パウリーナ・チャプコ、ドミニカ・フィグルスカ、アンナ・イルチュク、キンガ・プレイス
ハリナ・ラシャクヴナ、ヴォイチェフ・ジェミァンスキ
製作：ヴロツワフ・ポーランド劇場

Arrangement of text,
arrangement of music and
directed by
Jan KLATA
Written by
Bożena KEFF
Performed by
Paulina CHAPKO
Dominika FIGURSKA
Anna ILCZUK
Kinga PREIS
Halina RASIAKÓWNA
Wojciech ZIEMIAŃSKI
Produced by
Polski Theatre in Wrocław (Poland)

■ 22 June at 14:00
■ 23 June at 13:00

Duration: 90 minutes
In Polish with Japanese subtitles

6/22（土）14時開演
6/23（日）13時開演

一般大人4,000円／大学生・専門学校生2,000円／高校生以下1,000円
☆SPACの会特典のほか、ゆうゆう割引、みるみる割引、ペア／グループ割引料金などがあります。（最終頁参照）

直行バス　渋谷発　劇場直行バスを運行いたします。詳しくはP.46をご覧ください。

美術・照明：ユスティナ・ワゴフスカ　衣裳：ユスティナ・ワゴフスカ、マテウシュ・ステンプニャク
振付：マチコ・ブルーサク　サウンドスケープ：マグダレーナ・シニァデツカ　演出助手：イヴォナ・ルルチィンスカ
助成：ポーランド広報文化センター、ドルヌィ・シロンスク県庁

ポーランド広報文化センター INSTYTUT POLSKI

DOLNY ŚLĄSK

女たちの哀しみは、なぜ終わることなく続くのか――。ポーランド演劇界の旗手、ヤン・クラタがおくる、心を貫くステージ！

私たちの言葉で「母国」にあたる概念は、ポーランド語では「父国」と表現する。父国に生きる母親たちの怒り、哀しみ、喜び、愛が国の歴史を支えてきた。女流作家ボジェナ・ケフが描いた女性たちの葛藤を、演出家ヤン・クラタは丁寧にすくい上げ、5人の女性と1人の男性からなる“女”優たちのしなやかで強い肉体を通じて舞台上に開花させた。歌、ダンス、叫び…スペクタクルの果てに訪れる「癒し」にも似た快感は、現代を生きる私たちにとって格好のリフレッシュになるかもしれない。

歌い、踊り、叫ぶ！ 感動と癒しのミュージカル――。観る者すべての目と耳を捉えて離さない「圧巻の90分」。

これは今までになかったミュージカル。舞台上に展開されるシーンはどこを切り取っても印象的。“女”たちの歌とコミカルな踊りは、時にキッチュに、時に幻想的に変化する。繰り広げられる美術の素晴らしさ、鮮やかな照明や耳に残る音楽の絶妙なタイミング。私たちが良く知っているあの映画やこの物語から、あるいはギリシャ悲劇や聖書からの引用など、緻密に計算され、コラージュのように展開するテキスト。観る者すべての目と耳を捉えて離さない「圧巻の90分」を通して、自分の心の内にある「母」と「祖国」を想うのだ。

みどころ

変化の時期にさしかかるポーランドの演劇界、その最先端にはクラタがいる。

母と娘の対立という普遍的でどこにでもある光景に託して、女流作家ボジェナ・ケフが描いたのは、ホロコーストというポーランドの負った癒しがたい傷への憐憫、祖国を未だに強く束縛している排外主義と女性達を隷属物として扱い続ける家父長的な社会への静かな怒りだった。「隷属」はポーランド演劇界に通奏低音のように流れているテーマである。この苦難の歴史を背景に「重厚長大」な創作が国内外で評価を得てきた中で、ヤン・クラタの演出は異色で目を引く。華々しく垢抜けた舞台造形に目を奪われているうちに、感覚に毒を注ぎ込まれて文字通り、しびれる。本作はオリジナルテキストのスタイルを完全に踏襲しながら、その社会的テーマを見事に立体化し、俳優陣の高い身体性を立脚点に、戯画的かつ迫力のあるエンタテイメントに仕立ててある。2011年の初演以降、国内外で数多くの賞を獲得し、クラタの名前を世界に知らしめた意欲作の初来日である。（大西彩香）

©Natalia Kabanow

©Natalia Kabanow

あらすじ

「母」であり「娘」である6人の“女”たち――。ブロンドの髪を振り乱し、腰にスカーフを巻いてエネルギッシュに叫び、踊る。コーラスは時に扇情的に、時に叙情的に歌う。迫害を逃れたユダヤ人の母親がいる。その娘は母親のトラウマから逃れるために抵抗するが、成長した彼女は同様に母となり、自らの娘を束縛する…。古代から今に至る「母娘の不毛な姿」の中に浮かんでくるのは、ポーランドをはじめ多くの国家において繰り返された抑圧と抵抗の歴史、家父長的な社会の中で翻弄される女性たちの物語である。

©Natalia Kabanow

演出家プロフィール ｜ ヤン・クラタ Jan KLATA

演出家、劇作家。少年期の1986年、青少年劇作コンテストに応募して入賞。ワルシャワの演劇学校で演出を学んだ後、クラクフの公立演劇専門学校に移る。2002年、ヴロツワフ・ポーランド劇場が主催するヴロツワフ現代演劇フォーラムに応募した『グレープフルーツ・スマイル』が入賞。同劇場での上演が決まり、演出家デビューを飾る。その後、ポーランド国内の劇場を中心に上演を重ねる。08年からは再びヴロツワフ・ポーランド劇場に戻り、『母よ、父なる国に生きる母よ』（11年）などを上演。13年1月からクラクフ・スターリー劇場の芸術総監督。

コラム

ポーランド発、母と娘のガチバトル！

大岡 淳
OOKA Jun

日本では〈母なるもの〉は今も、神聖な地位を占めているのではないだろうか。私の同世代は『宇宙戦艦ヤマト』や『銀河鉄道999』のような松本零士作品に親しんできたと思うのだが、幼少期の私は、あのマザコン全開のキャラクター設定にドン引きで、周囲の男の子たちが、何の疑問も抱かずメーテルの下敷きなんか持っているのを見ると、おいおい！と心の中で叫んだものである。また大和和紀『あさきゆめみし』なんて読んでいる女の子たちに対しても、ちょっと待て、光源氏だって、桐壺更衣の影を追い求めるマザコン・プレイボーイじゃないか、イケメンだからってそんな男に憧れて、将来嫁姑問題で苦労したって知らないぞ！と、やはり心の中で叫んだものである。〈母なるもの〉おそるべし。

その一方で、思春期の私は、内田春菊・岡崎京子・原律子・桜沢エリカといった、いわゆる「女の子エッチマンガ家」の出現に遭遇した。若い女性マンガ家たちが、青年誌上で、自らの性や性欲について堂々と表現し始めたのだから、これは事件であった。〈母なるもの〉への抵抗とも思えた。わけても内田春菊が、フェミニズムのような理屈からではなく、すったもんだの人生経験から、男たちと母たちのマザコン的共犯関係を告発する戦闘的表現者へと成熟していったことには、思わずブラボーを叫んだものだった。心の中で。

こんな話に共感するあなたも、反発するあなたも、ぜひ『母よ、父なる国に生きる母よ』を観てほしい。昨年春にワルシャワ演劇祭に招待され、ポーランド演劇の最先端の作品群を片端から観て回り、最も感動したのがこの芝居である。テーマは、ずばり母と娘の関係。母と息子の関係に負けず劣らず、母と娘の関係ってのも面倒でしょ？「友達母娘」なんてゴマカシでしょ？と私は思うのだが、遠くポーランドにも、似たようなことを考えている人たちがいたというわけである。パワフルで、ユーモラスで、社会派でもある、極上のエンタテインメントを堪能して下さい。私も、今度こそ声に出してブラボーを叫びます。

©Natalia Kabanow

大岡淳（おおおか・じゅん）
1970年兵庫県生まれ。演出家・劇作家・批評家。SPAC文芸部スタッフ、ふじのくに芸術祭企画委員、はままつ演劇・人形劇フェスティバルコーディネーター、静岡文化芸術大学非常勤講師。

SPAC OUTREACH

ＳＰＡＣのアウトリーチ活動紹介 その①

SPACでは、劇場での公演のほかに、さまざまな場所において、
みなさんが演劇や劇場に接する「きっかけ作り」となるようなアウトリーチ活動を積極的に行っています。

リーディングの様子

SPAC 芸術街道 リーディング・カフェ・ツアー 2013春

～ちょっとだけ役者気分な Tea Time ～

「役者さんってやっぱり違うわねェ」・・・いえいえ、そんなアナタも台本のセリフを読んでみませんか？ SPACリーディング・カフェは、俳優と参加者が一緒にお茶を飲みながら演劇の台本を声に出して読んでみるSPACの人気企画です。2008年の開始以来、県内東部から西部まで、さらには県外にも出向き、実施回数は250回を超えました！

ときには「プロの役者さんが読むのを聴くのかと思ってました」とか「私は見学で・・・」という方もいらっしゃいます。でも大丈夫！まずは目の前にある台本を手にとってみましょう。お茶とトークを楽しみながら、進行役のSPAC俳優・奥野晃士が解説を交えて、ゆる～く&優しくリードします。ギリシャ悲劇やシェイクスピアも、歯の浮くような甘いセリフも、声に出せば「アナタの言葉」に早変わり！

リーディング・カフェは地域や場所を選びません。カフェなどの店内のみならず、お寺や古民家、ときには病院や学校、就活に婚活と、ご要望をいただければSPACメンバーが劇場を飛び出てどこへでも赴きます！

ナビゲーター：SPAC 俳優 奥野晃士

読む戯曲

『サン・サクルマンの四輪馬車』（作:プロスペル・メリメ）
SPAC新作『黄金の馬車』（演出・宮城聰）の原作を一足先にリーディング！
※5/11は『ゴドーを待ちながら』（作:サミュエル・ベケット）

ナビゲーター：SPAC俳優　奥野晃士
参加費（ドリンク代込み）：1000円
所要時間：約2時間30分

ご予約・お問い合わせ
SPACチケットセンター TEL.054-202-3399（10:00～18:00）
最新の開催予定はSPAC公式サイトまたはリーディング・カフェのfacebookページ（www.facebook.com/recafeSPAC）をご覧下さい。

これからの主な開催予定

5月5日（日・祝）15:30
和食処 一祥庵
（藤枝市岡部町岡部 817 番地 大旅籠柏屋歴史資料館内）
TEL. 054-667-5215

5月6日（月・休）10:30
meguri 石畳茶屋
（島田市金谷坂町 2482-1）
TEL. 0547-45-5715

5月11日（土）13:30
ハングルナラ
（静岡市葵区伝馬町 24-4）
TEL. 054-251-2942

5月17日（金）19:00
Être Gallery（エトルギャラリー）
（三島市芙蓉台 1-13-19）
TEL. 080-6915-1888

5月21日（火）19:00
カフェ・コンコルド
（浜松市中区鴨江 2-55-23）
TEL. 053-456-2656

5月23日（木）18:30
コトノネカフェ
（富士宮市宮町 14-2 富士宮市民文化会館内）
TEL. 0544-23-7767

この他にも予定しています。

和食処 一祥庵での開催時の様子

◎ 開催のご要望も承ります。どうぞお気軽にご相談下さい。

お問い合わせ
SPAC-静岡県舞台芸術センター 芸術局 制作部 アウトリーチ担当 TEL.054-203-5730

©北澤肚太

静岡芸術劇場

SHOJI KOJIMA FLAMENCO 2013

生と死のあわいを生きて

―フェデリコの魂に捧げる―

Entre la Vida y la Muerte : homenaje al alma de Federico

世界初演

フラメンコ／日本 Flamenco／JAPAN　上演時間：60分

踊り：小島章司
カンテ：ダビ・ラゴス、エル・ロンドロ
ギター：チクエロ、フラビオ・ロドリゲス
製作：SPAC、エストゥディオ コジマ

Performed by
KOJIMA Shoji
David LAGOS (Cante)
El LONDRO (Cante)
Chicuelo (Guitar)
Flavio RODRIGUES (Guitar)
Produced by
SPAC and ESTUDIO KOJIMA

■16 June at 14:00

Shizuoka Arts Theatre
Duration: 60 minutes

6/16（日）14時開演

一般大人4,000円／大学生・専門学校生2,000円・高校生以下1,000円

☆SPACの会特典のほか、ゆうゆう割引、みるみる割引、ペア／グループ割引料金などがあります。（最終頁参照）

後援：スペイン大使館 Embajada de España、セルバンデス文化センター東京、日本フラメンコ協会、財団法人日本スペイン協会

EMBAJADA DE ESPAÑA スペイン大使館

Asociación Nipona de Flamenco anif

Instituto Cervantes

鳥のように、神のように、ここ静岡に舞い降りる…。小島章司、この日だけのための特別なステージ。

フェデリコ・ガルシア・ロルカが殺されてから3年後の1939年、スペイン内戦が終結した。その年に徳島県で生まれた小島章司は現在73歳。今も現役で踊り続ける、世界的なバイラオール（舞踊手）である。小島はフラメンコの定義や枠を遥かに超越した表現で観る者を圧倒する。ブラウスにファルダという姿で現れ、長髪を翻してサパティアードを踏む姿は、性差、年齢、国籍といったあらゆる「壁」をたやすく透過する神々しさをまとう。まさに進化し続けるドゥエンデ（精霊）、その孤高の肉体が舞う、一日限りの特別なステージが実現する。

宗教的イメージと官能的メタファーの重層に潜む深い精神性…、召喚されたロルカの魂に、私たちは劇場という奇跡の場所で出逢う。

1999年、出来たばかりの楕円堂で上演された『ロルカの闇』を覚えている人もいるだろうか。フェデリコ・ガルシア・ロルカの生誕から101回目の誕生日にあたったこの公演から14年。再び人々は新緑の静岡でフェデリコと邂逅するチャンスを得る。彼の描いた因習と差別に苦しむ女性達の締念や怒りを一身に引き受け、フラメンコの「ロ・ホンド（奥深きもの）」を掴もうとする小島の真摯な指先は、作家の魂をしばし召還し、我々の前に立ち会わせるに違いない。それは、生と死の狭間にある場所…劇場でしか触れられぬ奇跡の瞬間である。

みどころ

「死者がもっとも生き生きとしている国」スペインの太陽と影、祝祭と孤独の相反こそが小島章司の身体に宿る真実の詩である。

フラメンコは人間の持つ感情のすべてを大地から湧き出るような歌に乗せて表現する。絵空事ではない実人生の叫びが発露したものが踊りとなる。幼き日より故郷の歌に親しみ自ら作曲までしたロルカと、声楽家を志していた小島。その音楽への造詣は彼らの身体の中に生き続け、ロルカを詩作に向かわせ、小島を舞踊へと導いた。アンダルシアの魂とも言えるフラメンコが、時代を超えて両者を結びつけ、その土着的なテーマにまつわる通俗的なイメージを払拭した。その「母なるカンテ（歌）」ソレアに小島が身を委ねる際に立ちのぼる生と死の相克、孤独とのやりとり…。これらもまたその霊的なパワーに触れることが出来た幸運なアルティスタ達によって新たなる世代へと受け継がれていくのだろう。「血」の三部作を遺したロルカの人生が死によって今も光彩を放つとすれば、小島章司は踊り続けるその「生」によって時代を遡り伝説となる。（大西彩香）

©山廣康夫

©山廣康夫

©沢渡 朔

舞踊家プロフィール ｜ 小島章司（こじま・しょうじ）

フラメンコにその生涯をかけ、2009年、日本そしてスペインの両国からその功績を文化功労者というかたちで表彰された小島章司。73歳となった今も自らのフラメンコを求め、新たな境地を築き続けている。12年秋にはフラメンコの故郷、セビリアで2年に一度開催される世界最大のフラメンコ・フェスティバル、ビエナルに招かれ、セビリアのオペラハウスであるマエストランサ劇場でその代表作「ラ・セレスティーナ」を上演。「舞踊の最高峰」、「尊敬すべき規範」などスペイン各紙誌で絶賛された。

コラム

『生と死のあわいを生きて』上演に寄せて

今井 翼
IMAI Tsubasa

下北沢で、初めて小島章司氏の公演を観たとき、衝撃が走りました。

人間離れした存在感、いい意味でフラメンコの既成概念を覆す作品性、さらには表現の枠、国境・性別・年齢を超えた存在感。身体から湧きあがる言葉にならないエネルギーは、どんな衣裳をも透かしてすべてを見せている、そんな“生きた”芸術の力を感じたのです。

踊り、中でもフラメンコは表現者の血・肉・皺までも含めた人としての年輪や深み、生きざまを賭けて表現するものだと思っています。小島章司氏は、今のように簡単に渡欧できない1960年代に船で単身スペインへ渡り、フラメンコを学び、スペインのカンパニーに参加してツアーで踊っておられます。情報の無い時代にそこまでできる勇気はもちろんですが、僕が尊敬してやまないのは、氏のフラメンコへの情熱が単なる西洋文化への憧れではなかった点です。フラメンコを日本に持ち帰った氏は、やがて日本の古典芸能などと融合させた自国の文化・芸術としての独自の世界も切り拓かれました。そこには、深い人間愛と自国愛があり、それこそが大衆芸能であるフラメンコの魂だと思います。

今回はたった一回の舞台のために、氏が作品を創り、踊るといいます。さまざまな映像メディアを身近に楽しめる今ですが、フラメンコは生きた芸術。だからこそ、そのたった一回のために出かけ肌で何かを感じることをおすすめしたい。それが氏のような素晴らしい年月を重ねた芸術家のものであるならなおさらです。できれば、フラメンコを知らない人にこそ、心をまっさらにして接していただきたい。

僕自身、7年前からフラメンコに夢中で、スペイン文化特使も務めています。今年はつい最近2週間スペインへ行き、アンダルシアのタブラオで踊りました。言葉にすると角が立ったり照れくさかったりする感情も、フラメンコなら人間らしく自由に表現できる、それが魅力です。

これからは僕も日本人ならではのフラメンコの表現を通して、人間の魅力を多くの方に伝えたい。そしてその道の向こうにはいつも、豊かな時間を積み重ねた小島章司氏の背中があります。

（聞き手：浦野芳子）

©山廣康夫

今井翼（いまい・つばさ）

神奈川県出身。2002 年 9 月「タッキー&翼」として CD デビュー。出演した舞台をきっかけに、フラメンコを本格的に学ぶ。歌手・俳優などの幅広い活動を通して、スペイン文化の普及に貢献したことが評価され、昨年 6 月、世界初のスペイン文化特使に任命された。

ＳＰＡＣのアウトリーチ活動紹介 その②

SPACでは、劇場での公演のほかに、さまざまな場所において、
みなさんが演劇や劇場に接する「きっかけ作り」となるようなアウトリーチ活動を積極的に行っています。

SPAC俳優による「おはなし劇場」

楽器の音色や歌にあわせて、SPACの俳優が物語の世界へご案内します。
プロの俳優による、ひと味ちがう「おはなし」をお子さんと一緒にお楽しみください。

SPAC俳優による「おはなし劇場」では、これまでに『ブレーメンのおんがくたい』、『泣いた赤おに』、『しっぺいたろう』など、子どもに大人気、大人には懐かしい物語の数々をお届けしてきました。
楽器の生演奏や手遊び歌、そして間近でみる俳優の生の身体と声に、お子さんから親御さんまで誰もが夢中。
なかなか劇場での観劇はまだ難しいけれど…という０歳～未就学のお子さんや小学生、そして親御さんにおすすめの人気企画です。

「えほんのひろば」で毎月開催中！

「えほんのひろば」（ＪＲ東静岡駅前グランシップ２階）で、
毎月第４日曜日10:30～11:00に開催しています。
（変更・中止になる場合がございます。ご了承ください。）

近日開催予定
5月26日（日）
10:30～11:00
会場：えほんのひろば
予約不要　入場無料

＊今後の開催日程・出演俳優・演目は、決定次第SPAC公式サイトでご案内します。お楽しみに！
http://spac.or.jp/news/?p=6309

静岡市内の幼稚園にて『どうぞのいす』
―楽器の演奏に合わせて手遊び歌を説明中！

グランシップ えほんひろばにて
『ぐるんばのようちえん』
―ゾウのパペットを使い歌と手遊びで物語を表現

静岡市青葉シンボルロードにて
『しょうぼうじどうしゃ じぶた』
―STREET FESTIVAL IN SHIZUOKA参加
小劇場のような芝居小屋ステージで

静岡市内の子育て支援施設にて
『こびととくつや』
―おはなしの後は、楽器を通じて子どもたちと交流

「あなたの場所」で開催します！

出張開催をご要望の方へ

ショッピングセンター、図書館、保育園、幼稚園、小学校、子育てサークル、親子サークルなどでの出張公演も承っております。どうぞお気軽にご相談下さい。
※出演料・交通費などは応相談となります。

【対象】乳幼児～未就学児童と親御さん、小学生、保育に携わるみなさま
【内容】楽器の生演奏と手遊び歌によるおはなし（声と体と音で物語を構成）
【所要時間】30分～１時間程度
※年齢や開催場所・時間に応じて20分程度のおはなしの後、
ご要望に応じて楽器の紹介や俳優との交流などをおこないます。

お問い合わせ
SPAC-静岡県舞台芸術センター 芸術局 制作部 アウトリーチ担当　TEL.054-203-5730

© Frank Schroeder

静岡芸術劇場

Hate Radio

Hate Radio

日本初演

演劇／スイス、ドイツ、ルワンダ　Theatre／SWITZERLAND, GERMANY, RWANDA　上演時間：110分　フランス語・ルワンダ語上演／日本語字幕

脚本・演出：ミロ・ラウ
出演：アファザリ・デワエレ、セバスティアン・フーコー、エステル・マリオン
ナンシー・ンクシ、ディオジェーヌ・ンタリンドワ（アトム）
ドラマトゥルギー、コンセプチュアル・マネジメント：イェンス・ディートリッヒ
舞台美術・衣裳デザイン：アントン・ルーカス
映像：マルセル・ベーハティガー
音響デザイン：イェンス・バウディッシュ
製作：インターナショナル・インスティテュート・オブ・ポリティカル・マーダー（IIPM）

6月29日（土）・30日（日） 13時30分開演
◎終演後にミロ・ラウ（脚本・演出）と宮城聰によるアーティスト・トークを行います。

一般大人4,000円／大学生・専門学校生2,000円／高校生以下1,000円
☆SPACの会特典のほか、ゆうゆう割引、みるみる割引、ペア／グループ割引料金などがあります。（最終頁参照）

プロダクション・マネージメント：ミレナ・キプフミュラー　広報：イヴェン・アウグスティン　科学協力：エヴァ=マリア・バーチー　音響デザイン協力：ペーター・ゲーラー　コーポレート・デザイン：ニナ・ウォルターズ　学術アドバイス：マリー=ソレイユ・フルール、アスンプタ・ムギナレーザ、シモーネ・シュリントヴァイン　共同製作：Migros-Kulturprozent Schweiz, Kunsthaus Bregenz, Hebbel am Ufer (HAU) Berlin, Schlachthaus Theater Bern, Beursschouwburg Brüssel, migros museum für gegenwartskunst Zürich, Kaserne Basel, Südpol Luzern, Verbrecher Verlag Berlin, Kigali Genocide Memorial Centre and Ishyo Arts Centre Kigali　協力：Hauptstadtkulturfonds (HKF), Migros-Kulturprozent Schweiz, Pro Helvetia - Schweizer Kulturstiftung, Kulturelles.bl (Basel), Bildungs- und Kulturde-partement des Kantons Luzern, Amt für Kultur St. Gallen, Ernst Göhner Stiftung, Stanley Thomas Johnson Stiftung, Alfred Toepfer Stiftung F. V. S., GGG Basel, Goethe-Institut Brüssel, Goethe-Institut Johannesburg, Brussels Airlines, Spacial Solutions, Commission Nationale de Lutte contre le Génocide (CNLG), Deutscher Entwicklungsdienst (DED), Contact FM Kigali, IBUKA Rwanda (Dachorganisation der Opferverbände des Genozids in Ruanda), Hochschule der Künste Bern (HKB), Friede Springer Stiftung　後援：スイス大使館、ルワンダ大使館

Script written and directed by
Milo RAU
Performed by
Afazali DEWAELE,
Sébastien FOUCAULT,
Estelle MARION
Nancy NKUSI,
Diogène NTARINDWA (Atome)
Dramaturgy & Conceptual Management by
Jens DIETRICH
Set & Costume Design by
Anton LUKAS
Video Design by
Marcel BÄCHTIGER
Sound Design by
Jens BAUDISCH
Produced by
International Institute of Political Murder
- IIPM

■29, 30 June at 13:30

Shizuoka Arts Theatre
Duration: 110 minutes
In French and Kinyarwanda
with Japanese subtitles

Schweizerische Eidgenossenschaft
Confédération suisse
Confederazione Svizzera
Confederaziun svizra

Embassy of Switzerland in Japan
スイス大使館

軽妙なポップ・ミュージックの中に織り込まれた「悪意」「憎しみのラジオ」が撒き散らす死のプロパガンダ――。

1994年、ハビャリマナ大統領の暗殺を皮切りに未曾有の惨事「ルワンダ虐殺」が始まる。100日間で犠牲になった「ツチ族」の数は50万とも、100万とも言われる。この凄惨な大虐殺の一翼を担ったとされるのが、ミルコリンズ自由放送（RTLM）というラジオ局であった。ミロ・ラウはこのラジオ局のメインパーソナリティであったヴァレリーやカンタノ、現在は戦犯として収監されている関係者たちにインタビューを行い、ラジオ局の内部を詳細に再現した。「その時」ルワンダで最も人気のラジオ局で、いったい何が起きていたのか。

冷戦終結後最大のジェノサイドと言われる「ルワンダ虐殺」その裏には国民的な「声」を持つパーソナリティたちがいた。

隣人を襲う人々の手にはラジオが握られていたという。DJは「ツチ族」との友好を否定し、「フツ族」の団結を歌った、シモン・ビキンディの『こんなフツ族は嫌だ』を流し、女性パーソナリティのヴァレリーが「ツチ女性」へのレイプを示唆した後は、ニルヴァーナの『Rape Me』を流す。ベルギー人ジョルジュの伝える国際ニュースにはウィットと悪意のある“民族ジョーク”が混じり、カンタノは11歳のリスナーとの電話のやり取りで隣人を狩ることを鼓舞する。彼らを演じるのは、主にルワンダ出身の俳優たちである。　※現在のルワンダ政府は、「ツチ族」「フツ族」という民族の区分は植民地支配の産物であるとしている。

みどころ

劇場にいながら、あなたは歴史の目撃者となる。これはきわめて芸術性の高い「ドキュメンタリー演劇」だ。

IIPM（International Institute of Political Murder）は、演劇、映像、アートのミクスチュアによって歴史的な事件を再構築し提示する、その方法と理論を研究する為に2007年にミロ・ラウを中心に設立された。関係者や専門家へのインタビュー、現場検証などのリサーチを徹底的に行い、驚くべき精度で舞台に再現する。ドキュメンタリーでありながら芸術性の高さにこだわり、世界各地の演劇祭で「議論」を巻き起こしている。本作品はインタビューの様子を俳優たちが再現した映像がラジオ局の壁に映し出され、舞台作品でありながら展示作品の側面も持つ。ルワンダ虐殺では、夥しい数の死者がでるまで「国際社会」はこの人類史に残る凄惨な事件をどうすることもできなかった。20年近くが経過した今、「記録」ではなく「ライブ」で観客はこの事件の現場に立ち会うことになる…。　（大西彩香）

© Frank Schroeder

© Frank Schroeder

あらすじ

1994年、ルワンダの首都キガリ。この地では、ラジオが国民の生活に密接に関わる重要なメディアである。中でも若者を中心に人気の高い「ミルコリンズ自由放送局」のスタジオでは、2人の「フツ族」と1人のベルギー人による人気パーソナリティたち、それにミキサーが集まり、いつものように番組が始まろうとしている。ポップ・ミュージックの合間に軽妙なトークを交わしながら、彼らは「ツチ族」をゴキブリと呼び、その危険性や残虐性をまことしやかに訴え、人々を煽動するメッセージを「オンエアー」していく…。

© IIPM

演出家プロフィール ｜ ミロ・ラウ　Milo RAU

1977年、スイスのベルン生まれ。演出家、劇作家、ジャーナリスト、エッセイスト、研究者、コンセプチュアル・アーティスト、映画制作者として多彩な才能を発揮している。2007年に「インターナショナル・インスティテュート・オブ・ポリティカル・マーダー（IIPM）」を創立。演劇やファインアート、映画など様々な手法で歴史的事件を再現する方法を探りながら、理論的考察も進めている。『Hate Radio』はベルリンのHAUを始めとするヨーロッパの各劇場およびルワンダのキガリ・メモリアル・センターで上演、12年には「ベルリン・テアタートレッフェン」に、13年にはアヴィニョン演劇祭に招聘されている。

コラム

ルワンダメッセージ
—『Hate Radio』上演に寄せて

山路 徹
YAMAJI Toru

戦争を起こそうとする勢力（主に政治家）が、民心を掻き立て世論を戦争へと導く手段として必ず利用するのがメディアだ。全ての内戦・戦争において世論誘導にメディアが利用されている、と言っても過言ではない。

私が過去に取材した内戦や戦争においても100%メディアが利用されていたし、時に、メディア自身が戦争を煽っていたケースも少なくない。

例えば、1992年に勃発したボスニア・ヘルツェゴビナの内戦では、セルビア、クロアチアの各勢力が、それぞれ民心を煽るために主にテレビメディアを利用していた。民族や宗教の違いを巧みに利用し、世論を内戦へと導いた。そして、それまで仲良く暮らしていた隣人同士が突然、敵になってしまったのだ。更に悲劇なのは、内戦が長引き、犠牲者の数が増えていくと、それぞれの民族の心の中に取り返しのつかない憎しみが生まれ、始まりは決して民族・宗教の違いが本当の原因ではなかったのに、結果的に、民族・宗教戦争になってしまったことである。

また、2001年のアフガン戦争や2003年のイラク戦争において、戦争当事国であるアメリカはメディアを通じて戦争の必要性と正当性を国内のみならず世界に訴えた。特にイラク戦争においてアメリカは、「イラクが大量破壊兵器を保有している」という、イラク脅威論を喧伝し国際世論を味方につけたが、結局、これは事実ではなかったことが明らかになっている。

戦争の規模や性質はまったく違うが、舞台『Hate Radio』は、ルワンダ内戦の真実の一端を通して、内戦・戦争の本質をとても分かりやすく描いている。

そして、見る者の心の奥深くに突き刺さるメッセージには戦慄さえ覚えるのだ。また、『Hate Radio』は、メディアそのものに対する戒めと、メディアに踊らされてはいけない、という民への警鐘を鳴らしているように思う。

私たちの国・日本も最近では領有権問題がメディアを賑わす機会が増えてきたが、そこから何を読み解くのか? 日本の今後の平和はメディアの良識と国民のメディアリテラシーにかかっていると改めて思った。

© Daniel Seiffert

山路徹（やまじ・とおる）
1961年東京生まれ。1992年、国内初となる紛争地専門の独立系ニュース通信社「APF通信社」を設立する。これまでビルマ、ボスニア、ソマリア、カンボジア、アフガニスタン他、世界各地の紛争地を精力的に取材する。

まるふの週末はこうやって遊びつくせ!

ようこそ静岡へ！ようこそ「ふじのくに⇄せかい演劇祭2013」へ。
演劇祭のある週末を有意義に過ごしていただくために、さまざまな企画をご用意いたしました。
ぜひご参加ください！

フェスティバル bar

『黄金の馬車』 観劇前の腹ごしらえ、観劇後の語らいはココで!

アーティストと観客が思う存分交流できる場として「フェスティバルbar」をオープンします！ 静岡アートシーンを支える、「オルタナティブスペース・スノドカフェ」柚木康裕氏の協力を得て、ここでしか味わえないおもてなし空間を演出。昨年好評だった、「静岡クリエーター集団エエラボ」によるアート展示も行います。アルコールやソフトドリンク類などはもちろんのこと、おでん、ハンバーガー、カレーなどなど、さまざまな食べ物をご用意してお待ちしております！

営業日程：6/1（土）・8（土）・15（土）・22（土）18:00～19:15／『黄金の馬車』終演後～23:30
会場：舞台芸術公園「カチカチ山」
※22:30と23:30に東静岡駅経由静岡駅行きの無料チャーターバスを運行いたします。
※お車でお越しのお客様へは、アルコール類はご提供できませんので、ご了承ください。

無料呈茶サービス

静岡といえばやっぱりお茶！ SPAC新作『黄金の馬車』の上演前に、野外劇場前広場にて、静岡県立美術館ボランティア・グループ「草薙ツアーグループ」の皆さんによるウェルカム・ティーをご用意いたします。夏の夕暮れ時の野外、淹れたての美味しい静岡茶を存分にお楽しみください！（雨天中止）

日時：6/1（土）・8（土）・15（土）・22（土）18:00～19:15

劇場直行バス

超～お得なバスで“まるふ”に行こう!

東京方面のみなさまへ

青山学院大学青山キャンパス（最寄駅:表参道）前からSPACの劇場まで**片道1,000円**（通常の高速バスの半額～65%OFF!）でお越しいただけます。新幹線代と比べると往復で約10,000円もお得!
弾丸日帰りコースで駆け抜けるもヨシ！（6/1）
土曜日は思う存分”フェスティバルbar”でアーティストと語らい、その日は静岡に泊まって日曜日にゆっくり帰るもヨシ!（6/8～9・15～16・22～23）

三島・沼津、浜松方面のみなさまへ

三島駅・沼津駅、浜松駅からSPACの劇場までなんと!
無料でお越しいただけます。
在来線と比べると往復で約2,000円お得！

運行スケジュール等の詳細とお問い合わせは
P.46へGO!

ふじのくに⇄せかい演劇祭 2013 ｜ 関連企画

静岡からの日帰りもよし、
首都圏からの途中に立ち寄るもよし!

「ちょっとディープな」西伊豆めぐり

静岡の楽しみ方は、静岡人に聞いてみよう!
静岡を知り尽くした男が贈る、「ディープな」ふじのくに日帰りツアーのご提案!

「ふじのくに⇄せかい演劇祭」のために静岡にやってきたお客様（もちろん静岡県の方も）にお勧めの、日帰り観光コースを、静岡生まれで静岡育ち、勤務先も“静岡県庁”でしかもSPAC個人会員、旅とグルメの達人・山下浩平さん（34）に聞いてみました。「私自身、首都圏の友人に観光スポットやお勧めの食事処をレクチャーしてましたから、引き出しは多いですよ。県庁職員としては静岡市内だけでなく、県内全域を旅してもらいたいです。静岡県は東西に長いので、車があると圧倒的に便利。最近はレンタカー会社も随分リーズナブルになりましたので、ぜひディープな静岡県をドライブで楽しんでください。静岡県と言えば伊豆が有名ですが、熱海や伊東などの東伊豆に比べて、土肥や堂ヶ島など西伊豆の魅力は、まだまだ知られていません。そこで今回は、いま話題の『海上県道223号』を走る駿河湾フェリーを使った日帰り観光コースを提案します。」せっかく静岡に来たならば、これは行くしかない！

山下浩平さん

9:00 静岡市内 発

往路は陸路を。静岡から沼津へ高速道路を走ると、晴天なら眼前に巨大な富士山が。（首都圏からお越しの方は、東名&新東名沼津ICへ）

10:30 歴史の韮山エリア
（東名&新東名沼津ICから車で30分）

鉄板SPOT!

豊かな田園風景の向こうに里山、こんなのどかな地域に、世界遺産候補の構成資産『韮山の反射炉』、国宝『願成就院／運慶の仏像』、国指定重要文化財の史料を収蔵する『韮山代官江川邸』など、多数の文化財が。またこの地は平治の乱に破れ囚われの身になった源頼朝が配流され、北条政子と出会った歴史の舞台でもあります。願成就院の運慶の仏像も必見。

12:30 深海魚を喰う「魚重食堂」
DEEP SPOT!

駿河湾の海岸線沿いを走り戸田（へだ）へ。眼前に広がる駿河湾は日本一深い湾。戸田沖は港陸からわずか数kmの地点に最深2,500mの海溝があり、港では連日深海魚が水揚げされています。残念ながら演劇祭の期間は禁漁期（5～9月）のため、看板メニュー「深海魚刺身定食」は食べられませんが、「深海天丼」（1,250円）、「深海焼き魚定食」（1,300円）をご賞味あれ。

13:30 駿河湾深海生物館&戸田造船郷土資料館
DEEP SPOT!

水族館ではなく深海魚ミュージアム。剥製またはホルマリン漬けの「異形の生物」たちが薄暗い部屋の中に並ぶ、学校の理科室のホラー度を更に高めたような光景は、その手の映画好きにはたまりません。ただし、食欲は確実に失せるので、決して昼食の前には行かないように！ そして2階には船の模型が。戸田港は、日本初の西洋式帆船「ヘダ号」を建造した地でもあり、近代造船史を振り返る資料館が併設されている訳です。なお周辺は有名な釣りスポット。そのせいか、入口周辺が御覧の通りネコに占拠されている事があります。

14:30 象牙美術宝庫

現在ワシントン条約で輸入が禁止されており、再入手は困難とされる貴重な象牙美術品の数々を見学できます。他にも翡翠細工など中国の工芸品が並び、一人で入館しても、必ずスタッフの方がフロアガイドをしてくれます。売店では、「リーズナブルな価格で」象牙製品を販売。128万円ナリの麻雀碑は必見!

15:50 沢田公園露天風呂でほっこり
DEEP SPOT!

西伊豆では海沿いに立ち並ぶほとんどの旅館・ホテルは、日帰り入浴を受け付けていますが、特にお勧めなのがここ！ 戸田から海沿いに走ること1時間、仁科漁港脇の岩場を登っていくと簡素な小屋が。こんな所で？ と思いつつ、いざ入浴するとこの絶景！ 目の前の海を走る堂ヶ島遊覧フェリーから色々丸見えですが、そんな事は気にならない気分の良さです。

17:20 話題の海上県道223号（駿河湾フェリー）
鉄板SPOT!

土肥港（伊豆市）と清水港（静岡市）を65分で繋ぐ駿河湾フェリー航路は、船上から望む霊峰・富士山になぞらえ「海上県道223（フ・ジ・サン）号」と名付けられました。土肥港17:20発の最終便に乗船すると、季節によっては夕陽に染まって黄金色に輝く駿河湾と富士山の絶景を眺めながら、静岡に帰りつくことができます。

19:00 静岡芸術劇場または舞台芸術公園 着

もっともっと
情報を知りたい方は
SPAC公式サイトで
ご覧ください！

ちょっとしか時間がないという方には…1つずつ組み合わせれば「楽 しい2時間」を過ごせる、おすすめスポット&おいしいお店をご紹介!!

SPOT 1位 静岡県立美術館
JR草薙駅から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
☎054−263−5755

草間彌生「永遠の永遠の永遠」開催中（～6/23）！併設のロダン館では「考える人」「地獄の門」「カレーの市民」などロダン彫刻の代表作がいつでも鑑賞できる、全国でも貴重な美術館です。

SPOT 2位 日本平&久能山東照宮
日本平⇒舞台芸術公園から静鉄バス「日本平行き」で約15分
久能山⇒日本平からロープウェイで5分
☎054−334−2026（日本平ロープウェイ）

日本観光地100選の常連！富士山の眺望が魅力の「日本平」と、ロープウェイで行ける国宝「久能山東照宮」。徳川家康の躯があると言われている。併設の博物館もお勧め。

SPOT 3位 日本平動物園
東静岡駅から静鉄バス「日本平行き」で約10分
☎054−262−3251

観劇の興奮をクールダウンできる癒しスポット…。といいつつ最近のイチオシは「猛獣館299」。猛獣が299匹いる訳ではなく299（にくきゅう）が見えるほどガラス越しに近くで見られるよ、の意味。

食事 1位 炭焼きレストランさわやか（ハンバーグ）
電車なら⇒新静岡セノバ店（他県内28店舗）
静岡鉄道新静岡駅直結 ☎054−251−1611
車なら⇒静岡池田店 静岡芸術劇場、舞台芸術公園から車で10分
☎054−655−1766

静岡ローカルのハンバーグレストラン。その評判は、ネットで検索すれば歴然。他県から静岡に赴任した大学教授(40代)の弁「今まで食べた中で3本の指に入る」。溢れる肉汁を、ご堪能あれ!

食事 2位 清水港河岸の市（寿司、刺身）
清水駅南口から徒歩5分
☎054−355−3575

「静岡と言えば寿司」という方、とりあえずこちらに行けば安心。観光市場と食事処が同居。2,000円以下で上質な刺身(舟盛り！)や寿司(20貫以上！)がお腹いっぱい食べられます。

食事 3位 どんぶりハウス（生&釜揚げシラス）
JR用宗駅から徒歩10分用宗漁港脇
☎054−256−6077

静岡と言えば生シラス。この店の厨房は漁港内のプレハブ小屋、客席は屋外テントにパイプ椅子。だが目の前の漁港で採れたシラスを熱々のご飯にかけて食う漁師スタイル、美味くないはずがない！

ふじのくに野外芸術フェスタ

FUJINOKUNI
Open-air Performing Arts Festival under Mt.Fuji

6/28 Fri・29 Sat・30 Sun

主催：静岡県、SPAC-静岡県舞台芸術センター

Open-air Performing Arts Festival under Mt.Fuji
富士山 世界文化遺産登録応援企画！

富士山の雄大な姿は、周辺の風景とあわせた美しい展望も加わり、古くから信仰の対象であり、多くの芸術作品を生む母胎ともなってきました。静岡・山梨両県及び関係市町村等は、富士山の文化や自然、美しい景観を人類共通の財産として後世に継承していくため、富士山の世界文化遺産登録に向けた取組を進めています。そして、いよいよ、2013年6月にカンボジアで開催される第37回世界遺産委員会において登録の可否が審議されます。今回、「ふじのくに⇄せかい演劇祭2013」と同時開催される「ふじのくに野外芸術フェスタ」では、富士山本宮浅間大社内（富士宮市）と、富士山を背景に臨む清水港（静岡市）、グランシップ広場（静岡市）を会場に、舞台芸術を通じて富士の魅力を世界に発信します。

［清水港］清水マリンパーク イベント広場 静岡市清水区

協賛：鈴与グループ　清水港湾博物館（フェルケール博物館）　協力支援：静岡市

Shimizu Marine Park Event Square

清水港は、日本のほぼ中心に位置した港です。市民の生活圏と隣接しており、古くから市民の「憩い・交流」の場として親しまれてきました。また、複合商業施設や観光船発着場もあり、多くの人々で賑わっています。
●JR清水駅または静岡鉄道新清水駅下車、「波止場・フェルケール博物館」バス停下車徒歩5分

6/28［金］
17:30－18:15『ベトナム水上人形劇』
20:00－20:50『夢の道化師～水上のイリュージョン～』

6/29［土］
14:00－14:45『ベトナム水上人形劇』
17:30－18:15『ベトナム水上人形劇』
20:00－20:50『夢の道化師～水上のイリュージョン～』

© millstream

『夢の道化師 ～水上のイリュージョン～』

日本初演

Fous de Bassin [Water Fools]

水上パフォーマンス／フランス　Performance／FRANCE　上演時間：50分

演出：ブリュノ・シュネブラン
製作：イロトピー

6月28日（金）、29（土）20時開演
会場：清水マリンパーク イベント広場

チケット料金：無料

雨天決行 ※荒天の場合6月30日（日）20時に順延
Directed by Bruno SCHNEBELIN
Produced by Ilotopie
■28, 29 June at 20:00
Place: Shimizu Marine Park Event Square
Duration: 50 minutes

＜後援＞
在日フランス大使館
アンスティチュ・フランセ日本

演出家プロフィール ｜ ブリュノ・シュネブラン　Bruno SCHNEBELIN

1949年パリ生まれ。68年から80年に、フランスの批評家バルトや、社会学者ボードリヤールに影響を受け、精神分析学、社会学、建築などを学び、舞台の技術監督や、コンテンポラリーダンスの照明デザイン、音楽劇などの美術デザインを行う。78年にカマルグ（ローヌ川下流の三角地帯）の小さな島と出会う。80年、イロトピー活動開始後、フランソワーズ・レジェと共同芸術監督として世界45カ国以上でパフォーマンスを行なっている。

© Klauis Tummers

音楽と花火に彩られた、壮大で詩的な水上パフォーマンス

夜の海。水上を走る一台の車が止まり、男が降りてくる。街灯を灯し、腰を下ろして新聞を読みはじめる。掃除夫が通りを掃き始める。自転車が水しぶきを上げながら駆け抜けていく。どこにでもあるような、日常の風景…水のうえであることを除けば。そんな日常の中に、やがて暗い海の中から奇妙な生き物たちが闖入してくる。水彩画のような日常の風景は徐々に火に染まり、童話から抜け出してきたような登場人物たちが、バロック的祝祭を繰り広げていく…。

© Thanlong Water Puppety Theatre

『ベトナム水上人形劇』

Múa rối nước [Vietnamese Water Puppetry Theatre]

人形劇／ベトナム　Puppetry Theatre／Vietnam　上演時間：約45分

出演：ハノイ・タンロン水上人形劇場

およそ千年の歴史を持つといわれているベトナムの民俗芸能「水上人形劇」。数多くある劇団の中でも、ハノイ市内にあるタンロン水上人形劇場は1969年に設立以降、発展を続けてきたベトナム最高峰の劇団である。ベトナム国内での公演のみならず、海外での評価も高く、日本も含めこれまで40カ国以上の国で公演を行ってきた。舞台に見立てた水面上に、農村の生活風景をはじめ鳳凰や龍、仙女の舞、伝説や神話などが、きらびやかに、時に滑稽に、次々と繰り出される。

清水港公演
6月28日（金）17時30分開演
6月29日（土）14時／17時30分開演
会場：清水マリンパーク イベント広場

富士宮公演
6月30日（日）15時／16時30分開演
会場：神田川ふれあい広場

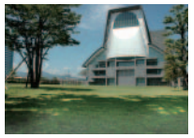
チケット料金：無料
※雨天時は客席に屋根を設置します。（荒天の場合中止）

Performed by Nhà hát múa rối Thang Long (Hanoi Thang Long Water Puppetry Theatre)
■28 June at 17:30 ■29 June at 14:00 / 17:30
Place: Shimizu Marine Park Event Square
■30 June at 15:00 / 16:30
Place:FUJISAN HONGU SENGENTAISHA Shrine garden
Duration: 45 minutes (expected time)

グランシップ広場 静岡市駿河区

Granship Square

美しい芝生とインターロッキングで仕上げられた広場。グランシップに訪れた人々の憩いと安らぎの場です。
●JR 東静岡駅南口より徒歩２分、グランシップ西側。



グランシップ広場では、国内3劇団による野外劇を連続上演します。劇場から飛び出した、気鋭の劇団によるスペクタクルをお楽しみください。

6/29・30［土］［日］
岡田圓／花傳シアターカンパニー
渡辺亮史／劇団渡辺
石井幸一／鎌ヶ谷アルトギルド／一徳会

［富士宮］神田川ふれあい広場（富士山本宮浅間大社内）富士宮市宮町

協力：富士宮市

FUJISAN HONGU SENGENTAISHA Shrine garden

富士山本宮浅間大社は、富士山を神として祀った全国に多数ある浅間神社の総本宮とされ、境内には溶岩の間から湧出した地下水が池となった湧玉池（国特別天然記念物）があります。
●JR 身延線富士宮駅から徒歩 15 分

6/30［日］
『ベトナム水上人形劇』
『古事記!! エピソード１』

SPAC-静岡県舞台芸術センター

『古事記!! エピソード1』

（演出：宮城聰　音楽：棚川寛子）

日本最古の歴史書である「古事記」から、静岡にも縁の深い「草薙の剣」の物語を、SPAC俳優たちの楽器生演奏とともに華麗に紡ぎだした宮城聰演出作品。

詳しい情報・アクセス方法などはSPAC公式サイトで

喝采も、応援も、明日のSPACを支えます

SPACの会 個人会員・ゆうゆう個人会員募集中

SPAC の会に入会して、ふじのくに⇄せかい演劇祭 2013 をお得にお楽しみください!
ご入会手続きはお早めに!

特典1 年間3回公演ご招待

SPACの多彩なラインナップからお好きな作品を3作品お選びいたけます。「ふじのくに⇄せかい演劇祭2013」を3演目観るなら入会するのがお得です。
（静岡芸術劇場と野外劇場「有度」での公演に限ります。招待枠はどなたにでもお譲りいただけます。）

特典2 会員先行予約

売切れ必至の人気公演も、お気に入りのあの席も確実にゲットしたい方におすすめ。一般販売に先駆けてチケットの先行予約ができます。

特典3 チケット割引

特典によるご招待3作品の観劇だけじゃ物足りない!もっと観たい!という方、すべての公演チケットが1名様で15%引き、2名様以上で20%引きとお得な価格でご購入いただけます。

特典4 ドリンクサービス

少し早めに劇場に到着して、富士山を眺めながらくつろぎの一杯を。終演後は観劇の余韻に浸りながら。1公演につき1回、会員証提示により「カフェ・シンデレラ」のコーヒーもしくは紅茶をサービスいたします。

特典5 バースデープレゼント

あなたの特別な日を劇場で過ごしてみませんか。お誕生月にご来場のお客様に、SPACからのバースデープレゼントをお渡しします。
（指定席公演限定・当日券は除く）

＊会員特典の対象は県民月間・県民劇団公演等、一部の公演を除きます。

年会費

個人会員	1口	10,000円（税込）
ゆうゆう個人会員※	1口	9,000円（税込）

※入会時に満60才以上の方が対象となります。

複数口でのお申込も承ります。3作品以上観たい! という方におすすめです。
複数口でご入会の方は特典1と4について口数分のサービスを利用できます。

会員の期間	入会年度の4月1日より翌年3月31日まで

＊年度途中入会の場合も、当該年度の3月31日までとなります。

個人会員・ゆうゆう個人会員入会申込方法

ウェブサイト
SPAC公式サイトからご入会手続きが可能です。継続入会をご希望の方は「会員マイページ」からお手続きいただけます。
個人会員にお申込みの方はセブン-イレブンでのお支払い、またはカードでのお支払いも可能です。
http://www.spac.or.jp

窓口
静岡芸術劇場チケットカウンターで申込用紙にご記入ください。

電話
SPACチケットセンター までお電話ください。
TEL.054-202-3399

＊ 郵送・FAXでのお申込みをご希望の方は、SPACチケットセンターまでご連絡ください。折り返し申込用紙をお送りいたします。
＊ ゆうゆう個人会員にお申込みの方は年齢のわかる身分証のコピーをご提出ください。

SPACの会 賛助会員・特別賛助会員募集中

SPACの活動を通じての静岡県の地域文化振興に、ご支援をお願いいたします。

みなさまから頂いたご支援は、次のような事業・活動などのために活用させていただきます。

中高生鑑賞事業・人材育成事業・国際交流事業・アウトリーチ活動

特別賛助会員
寄附金額
個人の方 3万円以上
法人の方 5万円以上

ご寄附をいただいた個人・法人の方を、それぞれ「個人特別賛助会員」、「法人特別賛助会員」とさせていただきます。
- SPACの劇場内や公式サイト、またチラシなどの印刷物において芳名を掲載しご支援を紹介いたします。
- 最新の公演計画等の活動情報を定期的に提供いたします。
- 税制上の優遇措置がございます。

賛助会員
年会費
個人・法人とも
105,000円
（消費税5%込み）

募集の対象：賛助会員募集の趣旨にご賛同いただける個人・法人
（個人の方は「個人賛助会員」、法人の方は「法人賛助会員」とさせていただきます。）
- SPACの劇場内や公式サイト、またチラシなどの印刷物において芳名を掲載し、ご支援を紹介いたします。
- SPACが実施する演劇等の活動について、個人賛助会員の方はすべての公演・講座に、法人賛助会員の方はすべての演目・講座に2名様までご招待いたします。
- SPACの公演についてチケットを購入される場合、30%引きとなります。
- 一般販売に先駆けて、チケットの先行予約ができます。
- 最新の公演計画等の活動情報を定期的に提供いたします。

詳細はSPAC公式サイトでもご覧いただけます。 http://www.spac.or.jp SPAC 検索

お申し込み・お問い合わせ
SPAC芸術局
TEL.054-203-5730

SPACの会 法人特別賛助会員

安心も、快適も、感動も。 株式会社 協栄 — 株式会社協栄 静岡支店
一般財団法人 静岡経済研究所
菱和設備株式會社 — 菱和設備

匿名1社

SPACの会 法人賛助会員

アートユニオン株式会社 — アートユニオン
アオシマシステムエンジニアリング
SBSプロモーション — SBS プロモーション
木内建設株式会社 — 木内建設
K's pro. — K's pro.
静岡朝日テレビ — 静岡朝日テレビ
くらしを考え、明日をつくる。 SHIZGAS — 静岡ガス
静岡銀行 — 静岡銀行
静岡県医師協同組合
静岡県関係職場労働組合連合
あなたの事業を応援するパートナー 静岡県信用保証協会 — 静岡県信用保証協会
JA静岡中央会 — 静岡県農業協同組合中央会
静岡済生会総合病院 — 静岡済生会総合病院
上智大学教育提携校 静岡サレジオ — 静岡サレジオ小・中・高等学校
静岡商工会議所 — 静岡商工会議所
静岡新聞 — 静岡新聞社
くらし、かがやく。 しずおか信用金庫 — しずおか信用金庫
だいいちテレビ — 静岡第一テレビ
静岡鉄道 — 静岡鉄道
SBS — 静岡放送
清水銀行 — 清水銀行
Suzuyo 鈴与株式会社 — 鈴与
スルガ銀行 — スルガ銀行
静清信用金庫 http://www.seishin-shinkin.co.jp — 静清信用金庫
DAIMAN — 大万紙業
EspacioTours — チャイナエンタープライズ株式会社
中日新聞社東海本社
テレしず — テレビ静岡
ナガハシ印刷株式会社 — ナガハシ印刷
日本平ホテル — 日本平ホテル
日本旅行 NIPPON TRAVEL AGENCY — 株式会社日本旅行 静岡支店
HARVEST HOMES — 有限会社ハーヴェストホーム
羽野水産株式会社 — 丸は羽野水産
株式会社プロシューマー（富士宮やきそば学会）
小田急 ホテル センチュリー 静岡 — ホテル小田急静岡
堀池塗装
丸茂電機株式会社 — 丸茂電機
村松歯科医院
YAZAKI — 矢崎総業株式会社
YAMAHA ヤマハサウンドシステム株式会社 — ヤマハサウンドシステム株式会社
渡邊工務店

匿名1社

※掲載は企業・団体名の50音順です。2013年4月現在
おかげさまで今年度は12社増えました。

SPACの会 個人賛助会員（敬称略／50音順）

石川 富与夫	江崎 善三郎	小倉 大介	倉石 寛	児島 良孝
佐藤 典子	高野 利秋	瀧 容子	中沖 麻美子	平野 雅彦
松井 純	八木 功	山本 好子	匿名２名	

劇場紹介

「ふじのくに⇄せかい演劇祭2013」の作品はSPACの各専用劇場で上演いたします。（『ポリシネルでござる!』をのぞく）

静岡芸術劇場
Shizuoka Arts Theatre
(seating capacity of 350)

静岡芸術劇場は、JR東静岡駅前のグランシップ内にある舞台芸術専門の劇場です。舞台と客席は同じ広さを有し、一体感を生み出すのに理想的な空間となっています。技術の粋をこらしたSPACの専用施設です。（350席）

静岡県舞台芸術公園
Shizuoka Performing Arts Park

日本平中腹に位置する約21ヘクタールの敷地に、野外劇場「有度」、屋内ホール「楕円堂」、稽古場や本部棟、研修交流宿泊棟などが点在するSPACの活動拠点。創作と交流の場です。

野外劇場「有度」
The Open Air Theatre UDO
(seating capacity of 400)

日本平の豊かな森を背景にした石造りの野外劇場。舞台後方にはお茶の木を植えた「茶道」も作られています。（400席・ベンチシート）
舞台芸術公園駐車場から徒歩3分。

屋内ホール「楕円堂」
Ellipse Theatre DAENDO
(seating capacity of 100)

漆黒の舞台と白木の柱が一体となった楕円空間は、観る者の意識を集中させ、宗教的な雰囲気すら生み出します。（100席・可動式）
舞台芸術公園駐車場から徒歩7分。

稽古場棟「BOXシアター」
BOX Theatre
(seating capacity of 100)

シンプルなブラックボックスの劇場は作品に応じて様々に舞台が組まれ、客席との一体感も存分に味わうことができます。（100席・可動式）
舞台芸術公園駐車場から徒歩5分。

ふじのくに⇄せかい演劇祭2013 劇場直行往復バス 運行スケジュール

公園＝舞台芸術公園
劇場＝静岡芸術劇場

東京バス

『ポリシネルでござる!』『黄金の馬車』
往路 6月1日(土) 9:30渋谷発 → 13:00劇場着　復路 6月1日(土) 22:00公園発 → 25:30渋谷着

『脱線! スパニッシュ・フライ』『黄金の馬車』『神の霧』
往路 6月8日(土) 10:30渋谷発 → 14:00劇場着　復路 6月9日(日) 17:45劇場発 → 21:15渋谷着

『Waiting for Something』『室内』『黄金の馬車』『生と死のあわいを生きて』
往路 6月15日(土) 9:00渋谷発 → 12:30公園着　復路 6月16日(日) 20:00公園発 → 20:10劇場経由 → 23:40渋谷着

『母よ、父なる国に生きる母よ』『室内』『神の霧』『黄金の馬車』
往路 6月22日(土) 9:30渋谷発 → 13:00劇場着　復路 6月23日(日) 19:30公園発 → 19:40劇場経由 → 23:10渋谷着

往路集合場所：青山学院大学 青山キャンパス正門前　集合時間は出発時刻の15分前です。
※**乗車条件**：乗車ご希望のバスが運行される週末の公演のうち 2演目以上 ご観劇の方
乗車料金：片道1,000円

三島・沼津バス

『ポリシネルでござる!』『黄金の馬車』
往路 6月1日(土) 14:10三島発→14:40沼津経由→16:00劇場着　復路 6月1日(土) 22:00公園発→23:20沼津経由→23:50三島着

往路集合場所：JR三島駅北口／JR沼津駅北口（Bivi沼津前）　集合時間は出発時刻の15分前です。
※**乗車条件**：6月1日(土)『ポリシネルでござる!』『黄金の馬車』をご観劇の方
乗車料金：無料

浜松バス

『脱線! スパニッシュ・フライ』『黄金の馬車』
往路 6月8日(土) 12:30浜松発→14:00劇場着　復路 6月8日(土) 22:00公園発→23:30浜松着

往路集合場所：JR浜松駅北口（アクトシティ裏）　集合時間は出発時刻の15分前です。
※**乗車条件**：6月8日(土)『脱線! スパニッシュ・フライ』『黄金の馬車』をご観劇の方
乗車料金：無料

バス申込方法

東京バス
株式会社日本旅行　静岡支店
TEL.054-254-8375(受付時間=10:00～18:00／土日祝休み)
E-mail：atsushi_itakura@nta.co.jp

三島・沼津バス　浜松バス
SPACチケットセンター
TEL：054-202-3399　E-mail：bus@spac.or.jp

乗車ご希望の方は、①**氏名**、②**ご希望の日にち**、③**人数**、④**当日ご連絡が取れる電話番号**、⑤**往復か片道（往路か復路）か**、⑥**三島・沼津バスをご希望の方は乗車地を、電話またはメールにてご連絡ください。**
メールの場合、件名欄に「東京バス申込み」または「浜松バス希望」または「三島・沼津バス希望」と必ずお書きください。

※バスは定員になり次第、締め切らせていただきます。観劇予定のチケットは必ずバス予約の前に電話・窓口・ウェブにてご予約ください。※到着の時間は概ねの時間帯です。上演時間、出発時間、交通事情により大幅に変更となる場合もございますが、責任は負いかねます。予めご了承ください。※事情により、集合時間、行程を変更する場合があります。※バス車内ではシートベルト着用、禁煙にご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

交通情報

■静岡芸術劇場（静岡市駿河区池田79-4）

JR東静岡駅南口から徒歩約5分、グランシップの東側（清水寄り）に入口があります。

電車
◎最寄り駅のJR東静岡駅は、JR静岡駅より東海道本線（沼津・熱海方面、上り）で約3分（大人運賃:140円）です。
◎静鉄長沼駅から徒歩約12分です。 ※1時間に5～6本、10～15分間隔で運行しています。

自家用車
JR東静岡駅を目標にお越しください。駅南のグランシップ一般駐車場をご利用ください。
※駐車料金1時間100円。劇場内の精算機をご利用ください。

■舞台芸術公園（静岡市駿河区平沢100-1）

バス

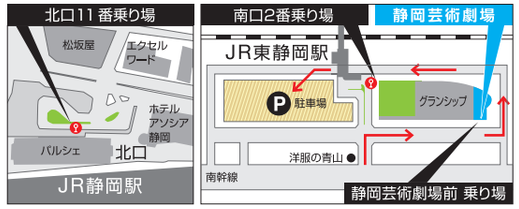
静岡日本平線停留所「舞台芸術公園」で降車してください。　□…無料チャーターバス

		JR静岡駅 北口11番乗場		JR東静岡駅 南口2番乗場		静岡芸術劇場前		舞台芸術公園
路線バス	10:30開演	9:29	→	9:39	→	—	→	9:51
	11:30開演	10:23	→	10:33	→	—	→	10:45
	13:30開演	12:23	→	12:33	→	—	→	12:45
無料チャーターバス	12:00開演			11:15	→	—	→	11:30
	16:00開演(6/15)			14:45	→	14:50	→	15:00
	16:00開演(6/16) 16:30開演(6/23)			15:15	→	15:20	→	15:30
	16:30開演(6/22) 16:45開演			15:35	→	15:40	→	15:50
	17:30開演			16:15	→	16:20	→	16:30
	19:30開演			18:00	→	18:05	→	18:15
				18:45	→	18:50	→	19:00

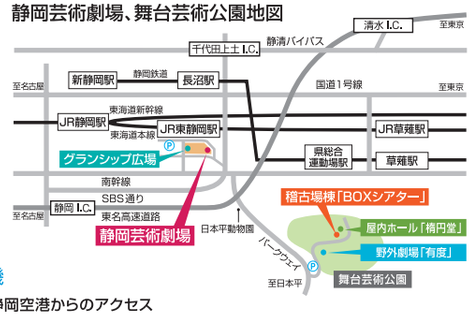
◎JR静岡駅北口11番乗場から約25分（運賃：大人370円）
◎JR東静岡駅南口2番乗場から約15分（運賃：大人250円）
※舞台芸術公園での公演終了後は、無料チャーターバスもしくは路線バスをご利用いただけます。

自家用車
◎東名高速道路清水I.C.から車で約30分、静岡I.C.から約30分、
静清バイパス千代田上土I.C.から約25分です。
◎日本平動物園より日本平方面へ1.8キロ先左手の舞台芸術公園内の駐車場をご利用ください。

JR静岡駅、JR東静岡駅バス乗り場、グランシップ駐車場地図



静岡芸術劇場、舞台芸術公園地図



そのほかのアクセス

高速バス
静岡までの高速バスは「高速バスネット」のウェブサイトをご参照ください。

飛行機
富士山静岡空港からのアクセス
空港からJR静岡駅までの所要時間バスで50分

JR東海道線時刻表　■JR静岡駅発 沼津・熱海方面（平日・休日 上り）

時	分（行き先）
9	4(熱海)　13(興津)　24(熱海)　31(三島)☆　34(三島)★　43(興津)　53(熱海)
10	3(興津)　13(三島)　21(興津)　25(富士)☆　33(熱海)　44(興津)　55(三島)
11	3(興津)　13(興津)　23(興津)　34(三島)　44(興津)　53(熱海)
12	3(興津)　13(熱海)　21(興津)　33(沼津)　43(興津)　53(沼津)
13	3(興津)　13(三島)　22(興津)　33(三島)　44(興津)　54(熱海)
14	3(興津)　13(熱海)　23(興津)　33(熱海)　42(興津)　53(熱海)
15	3(興津)　13(熱海)　23(熱海)　33(熱海)　43(興津)　53(三島)
16	5(熱海)　15(興津)　29(熱海)　36(熱海)　46(興津)
17	0(熱海)　10(沼津)　23(熱海)　33(熱海)　51(熱海)
18	10(熱海)　23(富士)　36(熱海)　50(熱海)
19	4(沼津)　21(熱海)　31(沼津)　42(興津)　52(三島)

■JR東静岡駅発 静岡・浜松方面（平日・休日 下り）

時	分（行き先）
15	5(島田)　17(島田)　26(浜松)　40(静岡)　48(島田)　55(浜松)
16	8(島田)　17(浜松)　24(静岡)　38(浜松)　50(浜松)
17	2(浜松)　8(島田)　20(浜松)　27(浜松)　45(浜松)　56(島田)
18	13(浜松)　25(浜松)　37(浜松)　50(島田)
19	5(浜松)　21(静岡)　33(浜松)　41(浜松)　55(島田)
20	9(浜松)☆　14(浜松)★　23(浜松)　34(島田)　48(島田)
21	8(浜松)　18(島田)　38(浜松)　49(島田)
22	1(静岡)　26(静岡)　45(静岡)

※興津・富士・沼津・三島・熱海・東京行きの全ての各駅停車が東静岡駅に停車します。　★…土曜・休日運休　☆…平日運休

（2013年3月16日現在）